



Shiga University of Medical Science

滋賀医科大学 統合報告書 2021

理念

滋賀医科大学は、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、
医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与することを理念とする。

使命

1. 豊かな教養、確かな倫理観、高い専門的知識を有する信頼される医療人を育成する。
2. 研究倫理と独創性を有する研究者を養成し、特色ある研究を世界に発信する。
3. 信頼と満足を追求するすぐれた全人的医療を地域に提供し、社会に貢献する。

地域に支えられ、地域に貢献し、 世界に羽ばたく大学

滋賀医科大学は、「一県一医大」構想の下、医学部医学科の単科大学として昭和49年に開学しました。
附属病院の開院や大学院医学系研究科の設置を経て現在に至ります。



滋賀医科大学の三大使命 3C

創造

1. Creation

優れた医療人の育成と
新しい医学・看護学
医療の創造

挑戦

2. Challenge

優れた研究による
人類社会・現代文明の
問題解決への挑戦

貢献

3. Contribution

医学・看護学・医療を
通じた社会貢献

サステナブルでアトラクティブな大学

Sustainable and Attractive

滋賀医科大学 統合報告書 目次 Contents

Message

学長メッセージ

Feature Article

特集記事

コロナ禍に進化し続ける滋賀医科大学

- 6/ コロナ禍における教育の進化
- 8/ SUMS変わりました

Explore SUMS

滋賀医科大学を知る

滋賀医科大学 半世紀の歩み

- 12/ 第3期中期目標・中期計画総括と今後の展望
- 14/ 歴史・沿革
- 16/ 数字で読み解く滋賀医科大学
- 17/ つながる滋賀医科大学

Missions

滋賀医科大学のミッション

Education

1 教育

明日の医療を担うために

- 19/ 教育のビジョン(担当理事メッセージ)
- 20/ 高い倫理観を礎とした多様性のある医療人の育成
- 21/ 絶え間ない教育改革の実践
- 22/ デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン採択
- 23/ 在学生の声
- 24/ 大学院教育の特徴

Research

2 研究

全ての人の健康のために

- 27/ 研究のビジョン(担当理事メッセージ)
- 28/ 特色ある4つの重点領域
- 30/ 若手研究者と女性研究者の支援
- 32/ 産官学金連携
- 35/ 研究活動を支援する体制

Clinical Practice

3 臨床

命と向きあうために

- 37/ 臨床のビジョン(担当理事メッセージ)
- 38/ コロナ禍元年とコロナ奮闘記
- 40/ コロナ禍においても働き方改革と人材育成の努力を
- 42/ 活躍する心臓血管外科
- 43/ 附属病院 財務情報

Community Healthcare

4 地域医療

医学・看護学は社会のために

- 45/ 地域医療のビジョン(担当理事メッセージ)
- 46/ 地域社会への貢献
- 48/ 地域医療教育:医学科
- 49/ 地域医療教育:看護学科
滋賀医科大学が地域に果たす役割と期待

Gender Equality

5 男女共同参画

キャリアをサポートするために

- 51/ 男女共同参画のビジョン(担当学長補佐メッセージ)
- 52/ 男女共同参画推進室10年のあゆみ

International Exchanges

6 国際交流

滋賀と世界をつなぎ地球の未来に貢献する!

- 55/ 滋賀と世界をつなぐ国際交流
- 56/ サポート体制の充実
- 57/ 留学生の声

Governance

ガバナンス

サステナブルでアトラクティブな大学を支える組織体制

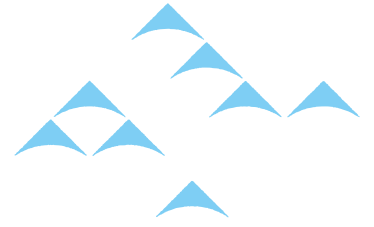
- 59/ ガバナンスのビジョン(副学長/事務局長メッセージ)
- 60/ 目標・計画の策定・実行・検証体制
- 62/ 内部統制システム・マネジメント改革

Finance

財務情報

自立した経営を目指す

- 65/ 国立大学法人の会計の仕組み
- 66/ 財務情報と戦略
- 70/ 滋賀県内への経済波及効果



サステナブルでアトラクティブな 滋賀医科大学と地域社会

国立大学法人滋賀医科大学長 上本 伸二

滋賀医科大学は開学47年となりますが、近未来が不透明な時代においては本学の存在基盤を明確にすることが大切です。“サステナブルでアトラクティブな大学と地域社会”をキーワードに掲げて、本学の理念である“地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与する”ことに邁進します。

サステナビリティを目指すのは滋賀県の医療、医学教育、研究、および大学のハード（施設と設備）とソフト（財政）であり、サステナビリティは将来に対する安心感の基盤です。

具体的なサステナビリティ維持の取り組みは下記ようになります。

① 地域医療のサステナビリティ

滋賀県の医療のサステナビリティに重要なのは滋賀県に定着する優秀な医師の育成を介した医師数の増加ですが、同時に慢性期と急性期医療のリーダーとなれる看護師の育成が本学の使命です。

② 教育のサステナビリティ

Society5.0を目指す社会変革の中で、医学領域においてもAI開発、ビッグデータ解析等のICTを駆使できる人材養成が求められています。

学部と大学院にSTEAM教育を取り入れ、同時に新型コロナウイルス感染環境で立ち上げたオンライン教育、シミュレーション教育を発展させ、未来に向けた医学教育システムを構築します。

③ 研究のサステナビリティ

動物生命科学研究センター、神経難病研究センター、NCD疫学研究センター、先端がん研究センターにおける特色ある研究の更なる深化に加えて、幅広い領域での研究活動を活性化します。その中で将来のリーダーとなる若手人材育成を推進するとともに、産学連携研究の推進により外部資金獲得を増加させます。

④ 大学組織のサステナビリティ

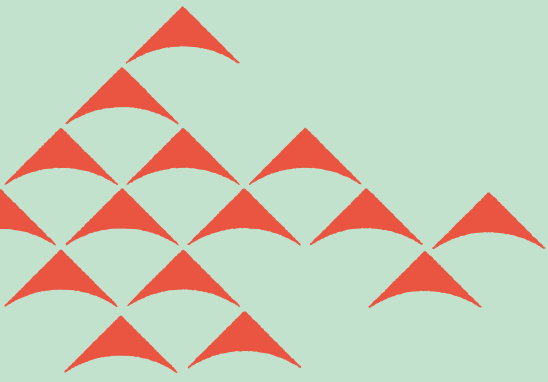
本学は施設と設備の老朽化が進んでいます。昨年度から施設と設備のマスタープランを作成し、国からの補助金および目的積立金の活用で整備の実施に努めており、今後もハード面でのサステナビリティを高めていきます。ソフト面では附属病院の経営が重要であり、良好な経営が目的積立金の持続に繋がります。附属病院の高度医療推進をさらに高めながら、機能強化棟新設の準備を予定通りに進めていきます。

地域医療に貢献し続けるために 医学・看護学の発展に寄与し続けるために

サステナビリティ基盤構築の中で、大学組織の透明性、デジタル技術の活用を含む業務の効率化、多様なステークホルダーとのコミュニケーション、男女共同参画推進計画の地域への展開、ハラスメント防止、等を推進して、教職員および学生が相互に尊重しながら明るく前向きに活動できる魅力ある（アトラクティブな）大学創生を目指したいと思います。

また、滋賀県内外において、多くの卒業生たちが医療や研究の現場で活躍しています。今回の統合報告書では卒業生の活躍の様子も皆さんにご紹介したいと思います。特に、若手医師や看護師そして学生にとって、自分たちの先輩が活躍している事実が将来のキャリアパス形成の何よりの励みになると思います。在学生は、活躍する先輩たちを目指しながら、新たな滋賀医科大学と地域社会の創生に邁進してほしいと願っています。





1.特集記事

コロナ禍に進化し続ける 滋賀医科大学

| Feature Article |



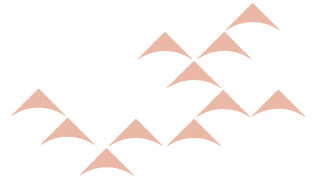


～ Continuing Evolution Towards the Post COVID-19 Era ～

コロナ禍は社会に様々な影響を与えてきました。特に学生生活は3密を避けることが困難であり、ハイフレックス授業による対面再開後も課外活動や実習は制限を余儀なくされました。滋賀医科大学は学生の声に耳を傾け、学生のために考え、学生とともに進化してきました。特集記事ではその進化の一部をご紹介します。

コロナ禍における教育の進化

Educational Evolution During the Covid-19 Era



コロナ禍の大学の対応

■ ハイフレックス授業

対面授業とオンライン配信を同時に行い、さらに講義動画のオンデマンド配信で学生が自律的に復習できるように対応しました。また、オンライン授業に必要な電子機器の貸出しも実施しました。



学生の要望に対する大学の対応

1

授業映像、講義プリントを継続的にオンラインで配信・配付してほしい!!



2021年度は対面とオンラインを同時に実施するハイフレックス授業を継続します。

2

Zoom授業のアーカイブ動画を迅速にLMS*1にアップしてほしい、復習に役立てたい!!



スチューデント・アシスタントの協力を得て可能な限り早くアップできるよう対応します。

3

一般教養棟改修工事完成後、現在使用中の国家試験対策用学習室はどうなるの?!



国家試験の勉強スペースは希望者に確保します*2。
さらに、学生のみなさんの学習スペースとして多目的教室やアメニティ施設を拡充していきます。

※1 LMS(Learning Management System) : eラーニングを実施するなどの学習管理システム

※2 工事の状況によって場所は変わることがあります

上本学長と学生の懇談会を実施

学生のニーズを把握し、学修や生活面での問題、健康問題、クラブ活動などの学生主体の活動に関する問題等について、適切に大学の運営に反映させていくことを目的として、毎年開催しています。

上記は一部を紹介しています。



■ 学修機会の担保

来学が難しい学外講師による講義も遠隔で実施することができました。

■ 講義開始時間の調整

学年ごとに講義時間を調整することで登校時間、昼食時間をずらすことができ、少しでも密を避けられるようにしました。

■ 実習のサポート

医学科の臨床実習、看護学科の臨床実習で学生が安心して取り組むことができるよう、マスクやゴーグルを配付しました。



附属病院夜間PCR検査体制への学生の協力

附属病院では、緊急手術症例や入院時全症例に加えて、滋賀県からの行政PCR検査の要請にも対応するため、当院検査部だけでなく、資格を有する本学大学院生等の協力のもと、夜間・休日にも検査可能な体制を構築しています。検査体制を強化するため、学部学生に対し夜間PCR検査(LAMP法)従事者を募集しました。

普段の講義では知ることができなかった病院での検査体制や検査方法を学ぶことができ、非常に良い経験となりました。このような形で前職の経験を活かしたことを嬉しく思います。今後も、自分にできることで役割を見つけていきたいです。

医学科第3学年 小峰 愛理



入学前に取得していた臨床検査技師の資格を生かして大学に貢献することができ、大変嬉しく思っています。検査技師としての実務経験がなく少し不安でしたが、詳しいマニュアルや丁寧な研修があり、安心してスムーズに業務を進めることができています。

研修で指導して下さった検査部の皆様に深く感謝申し上げます。

医学科第3学年 吉村 碧海



SUMS変わりました

SUMS has been changing

学生ラウンジ



個人利用も

グループ利用も!

バス停(西門前)が近く、
短時間の利用に最適です。

他の学生の勉強姿が
目に入り、自分もがんばる
ことができます。

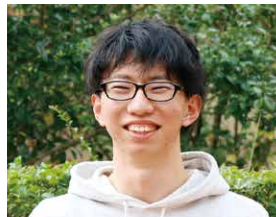
窓際にカウンター席も
あり、個人で利用する
ことが多いです。

机が広くタブレット等の
電子デバイスの利用が
しやすいです。

学生課の事務室も
隣接していて、聞きたいことがあったらすぐに行くことができます。



図書館と比べて静かすぎず、
騒がしすぎず、集中することが
できます。
さらに集中したいときや声を出して勉強したいときなどは多目的教室を予約して利用しています。



医学科第3学年 堀井 裕登



医学科第3学年 川合 惇也

グループワークも
しやすいです。



短時間利用も

長時間利用も!

友達と談笑したり、
本を読んだりします。

座り心地が良く
長時間勉強していても大丈夫!
お気に入りのブースです。

学生ラウンジ利用時間 / 8:00~22:00



エントランスステージ



学生の要望により
学園祭(若鮎祭)や様々な
イベントで活用できる
ステージができました

多目的教室



共用試験OSCEの公的化に対応した施設整備

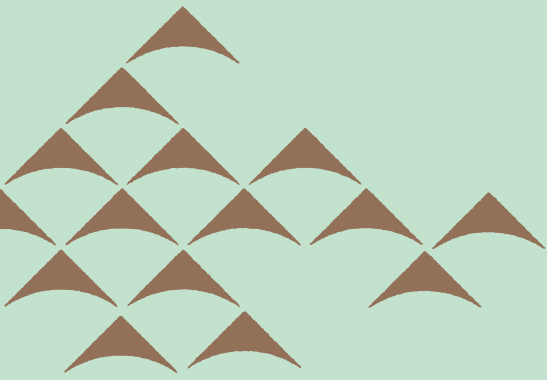
多目的教室は、普段は主に自習室として学生の皆さんにご利用頂いていますが、共用試験OSCE（オスキー）における試験室としても活用できるよう整備されています。共用試験には知識領域を評価するCBTと技能・態度領域を評価するOSCEとがあり、医学部において全国的規模で実施されています。令和3年に医師法が改正され、令和5年からCBTと臨床実習前のOSCEに合格すると医業（の一部の予定）を行なうことができる、令和7年から共用試験の合格をもって国家試験受験資格とする、ことが定められました（共用試験の公的化）。共用試験は今後更に、入学試験や国家試験と同様の厳正かつ公正な実施が求められることとなります。

多目的教室は防音を強く意識した壁材を使用し、各部屋毎に2台のカメラと放送設備が備わっており、これまで以上にOSCEの厳正かつ公正な実施が可能となります。また、OSCE以外でも、シミュレータを用いた医療技能トレーニング室やワークショップにおけるグループワーク用の小会議室としての活用が可能です。

学生アメニティの充実は学生の要望を反映したのですが、同時に教育の充実をも可能にしています。滋賀医科大学はこれからも学生とともに進化し続けます。



医学・看護学教育センター 教授
伊藤 俊之

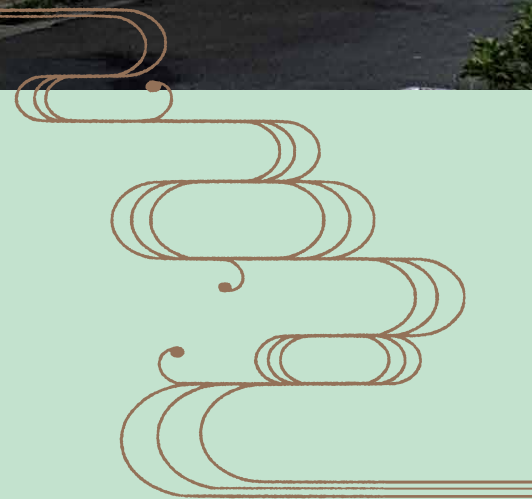
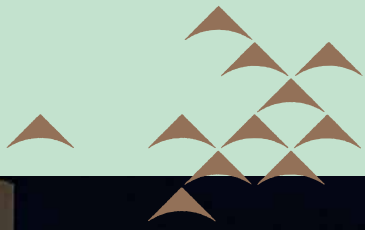


Ⅱ. 滋賀医科大学を知る

滋賀医科大学 半世紀の歩み

| Explore SUMS |





第3期中期目標・中期計画総括と今後の展望

～第4期中期目標期間に向けて～

特色ある取組 ～第3期中期目標・中期計画総括～

教育

■ 学生に対してより手厚い支援・指導を提供

- 第1学年の学生に対し、学生4～5名に対し1名のアドバイザー教員を配置。
- 医学科第3学年後期以降の学生に対し、学年担当を1名から2名に増員。
- 相談等の窓口として保健管理センターに「何でも相談室」を設置。

■ グローバルリーダーの育成

- 文部科学省「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」を採択。
- 博士課程教育リーディングプログラムにおいて、NCD(非感染性疾患)に関するグローバルリーダーの育成を行い、10名が博士の学位を取得し、国内外で研究者、医師、教育者として活躍。

研究

■ カニクイザルを用いた新規治療薬の開発

- 作出したカニクイザルを用いて、H1N1亜型インフルエンザウイルスにかかる全粒子ワクチンの有効性の検定を実施。
- 新たに分離同定された高病原性鳥インフルエンザH5N6型の感染実験及び阻害剤の効果判定を実施。

■ 生活習慣病疫学分野における国際共同研究の推進

- 米国、英国、中国等との国際共同研究を推進。
- 海外からの大学院博士課程の留学生も参加して、毎年度10報以上の国際共著論文を発表。

■ 神経難病研究の推進

- 基礎研究ユニット、臨床研究ユニット、橋渡し研究ユニットからなる神経難病研究センターを設置。3ユニットが連携し、筋萎縮性側索硬化症(ALS)において、病気を引き起こすとされる異常なたんぱく質の除去方法を開発。

社会連携

■ 地域医療の拠点病院としての役割強化

- 滋賀県との意見交換会を毎年度4回実施し、県内の地域医療体制の在り方や医療政策等について提言を行った。
- 滋賀県第7次保健医療計画において急性期医療の拠点病院としての役割を果たしていることなどが記述され、県内におけるプレゼンスが大きく向上し、救急車の搬送受入数が増加した。

■ 地域振興イノベーションの創出

- 滋賀県成長産業発掘・育成コンソーシアムに連携機関として参画し、ベンチャー事業の創出支援を実施。
- 同プログラムの支援成果を発表する「滋賀テックプランングランプリ」では、第1回開催以降、毎回企業賞を受賞。平成30年度及び令和元年度には医学部学生も企業賞を受賞した。



3Cの推進

1. Creation (創造)
2. Challenge (挑戦)
3. Contribution (貢献)

附属病院

■ 看護師特定行為研修修了者の養成

- 平成28年度に国立大学法人で初めて看護師特定行為研修を開始。
- 令和3年度入学者からは、当初の3区分から全ての17区分に特定行為区分を拡大。

- 附属病院看護部に「特定看護師活動支援室」を設置し、研修終了後の活動とスキルアップの支援を実施。

■ 多職種によるチーム医療の推進

- 17の多職種専門チームの活動に加えて、「チーム医療統括委員会」の活動を本格化させ、医療の質の向上及び業務改善を推進。
- 平成30年度に受審した病院機能評価において、多職種による専門チームの活動等の項目で最高ランクのS評価を受けた。
- 平成30年度に新たに立ち上げた神経難病サポートチームについては、厚生労働省研究班から研究依頼を受けるなど全国的にも評価された。



業務運営等

■ 女性教員や医師への継続的な支援の実施

- 出産・育児・介護等に直面している教員が働きやすいように、研究支援員や特任助教を配置。本取組等が評価され、平成29年度に、内閣府の「女性のチャレンジ賞特別部門賞」を受賞。

■ 多様な財源を活用した施設整備

- アメニティ施設「JAMLTリップルテラス」を整備。
- 整備に当たっては、本学所有の土地を事業者に貸付け、事業者の負担により建物を新設するとともに、土地貸付料を徴収することで収入の増加につなげた。





今後の展望 ～第4期中期目標期間に向けて～

教育

- 高大連携の強化、入学選抜方法の改善と効果の検証。
- 情報科学系授業やSTEAM教育の積極的導入。
- 卒前・卒後教育がシームレスに連携した医師養成体制の整備、県内で活躍する医師の養成。
- 科学的視点と優れた実践力を備えた看護師、助産師、保健師の養成。
- グローバルな視点で課題に取り組むことができる医療人の育成。優秀な留学生の受入れ、グローバルに活躍する若手研究者の育成。

研究

- 重点研究領域の推進、基礎研究の成果の臨床応用。
- 大学の有するリソースの有効活用。
- 若手研究者を中心とした萌芽的研究支援。

附属病院

- 院内急変に鋭敏に対応できる早期警報体制の構築(CCOT:Critical Care Outreach Teamの構築)。
- 附属病院における特定看護師の実装化・タスクシフト。

社会との共創

- 地域医療を牽引するリーダーの育成を視野に入れた教育の実施。
- 訪問看護を中心とした人材の育成。
- 大学—地域産業間の連携推進、コンソーシアム等の組織体の構築、メディカルイノベーションによる地域貢献

男女共同参画

- 女性医師のキャリア継続支援(スキルズアッププログラム等)の拡充。
- 学部学生を研究支援員として雇用配置する「研究者のための研究支援員配置制度」の活用促進。

業務運営等

- IR(Institutional Research)機能・学外有識者会議・総合戦略会議等を活用した情報・知見の収集・分析。
- キャンパスマスタープラン・施設長寿命化計画に基づいた戦略的な施設の整備。
- 産業界からの外部資金の受入れ促進、効率的な資産運用、共用スペースの積極的な活用、知的財産の獲得。
- 統合報告書の発行、積極的な情報発信、対話の強化。
- AI・RPA(Robotic Process Automation)等のデジタル技術の積極的な導入。



中期目標・中期計画とは…

国立大学法人は、2004年度以降、国立大学法人法により、文部科学大臣が定める6年間の中期目標に基づき、中期計画及び年度計画を策定することが義務付けられています。また、各法人は、毎年度及び中期目標期間における業務実績について、評価(国立大学法人評価)を受けることが義務付けられています。
※第4期中期目標期間から毎年度評価は廃止。

国立大学法人評価



滋賀医科大学

第3期中期目標期間 (4年目終了時評価) 評価結果

	特筆	計画以上の進捗	順調	おおむね順調	遅れ	重大な改善
教育研究	教育		○			
	研究		○			
	社会連携		○			
	その他(グローバル化、附属病院)	○				
業務運営			○			
財務内容			○			
自己点検評価			○			
その他業務(施設設備の整備等)		○				

歴史・沿革



1974 ■2/16 滋賀医科大学創設準備室を京都大学に設置
昭和49年 ■10/1 滋賀医科大学開学(滋賀県守山市仮校舎) 1学科目(独語)を設置

1975 ■4/10 第1回医学部医学科入学宣誓式の举行
昭和50年 ■5/2 開学記念式典の举行
■6/23 しゃくなげ会(献体篤志家団体)の発足

1976 ■8/16 本校舎(大津市瀬田月輪町)の一部完成により仮校舎から移転
昭和51年

1977 ■9/17 解剖体慰霊碑の建立
昭和52年

1978 ■6/28 共同利用施設を設置(共同利用棟、RI施設、動物実験施設をそれぞれ共同研究センター、放射性同位元素研究センター、実験動物センターと改称)
昭和53年

1979 ■12/12 解剖センターの設置
昭和54年

1981 ■3/25 第1回医学部医学科卒業式の举行
昭和56年 ■4/14 大学院医学研究科の設置
■5/9 第1回大学院医学研究科入学宣誓式の举行

1985 ■3/23 第1回大学院医学研究科学位授与式の举行
昭和60年

1989 ■6/28 分子神経生物学研究センターの設置
平成元年

1990 ■6/8 保健管理センターの設置
平成2年

1994 ■4/1 医学部看護学科の設置
平成6年 ■4/25 第1回医学部看護学科入学宣誓式の举行

1997 ■4/1 マルチメディアセンターの設置
平成9年

1998 ■3/25 第1回医学部看護学科卒業式の举行
平成10年 ■4/1 医学系研究科看護学専攻修士課程の設置
■4/24 第1回大学院医学系研究科修士課程看護学専攻入学宣誓式の举行

1999 ■4/1 分子神経科学研究センターの設置
平成11年

2000 ■3/27 第1回大学院医学系研究科修士課程看護学専攻学位授与式の举行
平成12年

2002 ■4/1 動物生命科学研究センターの設置
平成14年 ■5/22 MR医学総合研究センター、生活習慣病予防センターの設置
■11/6 医療福祉教育研究センターの設置

2004 ■4/1 医療人育成教育研究センターの設置
平成16年 ■6/3 スキルズラボの設置

2005 ■4/1 助産師課程の設置
平成17年 実験実習支援センターの設置

2006 ■6/29 バイオメディカル・イノベーションセンターの設置
平成18年

2007 ■2/1 滋賀医科大学保育所の設置
平成19年

2008 ■9/25 産学連携推進機構の設置
平成20年

2009 ■4/1 神経難病研究推進機構の設置
平成21年

2011 ■7/1 男女共同参画推進室の設置
平成23年

2013 ■4/1 アジア疫学研究センターの設置
平成25年

2014 ■4/1 地域医療教育研究拠点の設置
平成26年 ■9/4 スキルズラボ棟の竣工

2015 ■11/26 倫理審査室の設置
平成27年

2016 ■4/1 神経難病研究センターの設置
平成28年

2017 ■4/1 医学研究監理室の設置
平成29年 ■5/1 研究活動統括本部の設置

第1期中期目標
中期計画
2004-2009

1980 ■1/9 医学部附属病院の病床
昭和55年 120床増床(計440床)
■5/21 医学部附属病院の病床
160床増床(計600床)

1990 ■6/8 救急部の設置
平成2年

1993 ■4/1 集中治療部の設置
平成5年

1995 ■4/1 院内学級(瀬田東小学校)開設
平成7年

1996 ■4/1 輸血部の設置
平成8年

1997 ■4/1 総合診療部の設置
平成9年



1978 ■4/1 医学部に附属病院を設置
昭和53年 15診療科設置
■10/1 医学部附属病院開院(320床)

1974

本学は2024年に
開学50周年を迎えます。



2024

第4期中期目標
中期計画
2022-2027

第3期中期目標
中期計画
2016-2021

第2期中期目標
中期計画
2010-2015



2018 ■4/1 情報総合センターの設置
平成30年 ■6/14 教育推進本部の設置

2019 ■4/1 IR室の設置、アドミッションセンターの設置
平成31年 先端がん研究センターの設置、総合戦略会議の設置
令和元年 ■7/1 医学・看護学教育センターの設置

2020 ■4/1 国際交流センターの設置
令和2年

2021 ■4/1 NCD疫学研究センターの設置
令和3年

2024 ■10/1 開学50周年
令和6年

1999 ■4/1 治験管理センターの設置
平成11年

2001 ■4/1 医療情報部の設置
平成13年

2002 ■4/1 光学医療診療部の設置
平成14年 第一、第二、第三内科を循環器内科、呼吸器内科、消化器内科、血液内科、内分泌代謝内科、腎臓内科および神経内科に、第一、第二外科を消化器外科、乳腺・一般外科、心臓血管外科、呼吸器外科に再編
■4/17 医療安全管理部、卒後臨床研修センター、地域医療連携室の設置

2003 ■4/1 リハビリテーション部の設置
平成15年 病理部の設置

2004 ■4/1 中央診療施設等および特殊診療施設を改組し、中央診療部(15部)、医療安全管理部、地域医療連携部、医療研修部、卒後臨床研修センターおよび治験管理センターに再編
救急・集中治療部の設置
■8/1 臨床工学部の設置



2005 ■4/1 化学療法部の設置
平成17年 ■8/1 栄養治療部の設置

2007 ■4/1 腫瘍センターの設置
平成19年 ■8/31 新病棟(D病棟)竣工

2008 ■6/1 感染制御部の設置
平成20年 ■7/1 患者支援センターの設置

2009 ■4/1 医師臨床教育センターの設置
平成21年 ■10/20 腫瘍内科の設置
■12/1 看護臨床教育センターの設置

2010 ■3/1 院内助産所の開設
平成22年 ■7/1 医学部附属病院の病床が6床増床(精神病床45床、一般569床、計614床)

2011 ■3/12 東日本大震災へDMATチーム(災害派遣医療チーム)を派遣
平成23年 ■10/1 臨床研究開発センターの設置

2013 ■3/25 手術支援ロボット「ダ・ヴィンチSi」を導入
平成25年

2014 ■3/31 ヘリポート竣工
平成26年 ■4/1 院内学級(瀬田中学校)開設

2016 ■2/1 特定行為研修推進室の設置
平成28年 ■4/1 総合周産期母子医療センターの設置
■10/1 形成外科の設置

2017 ■4/1 看護師特定行為研修センターの設置
平成29年

2021 ■9/1 Stroke Care Unit(SCU)正式運用
令和3年 ■10/29 トリアージ棟竣工

病院

数字で読み解く滋賀医科大学

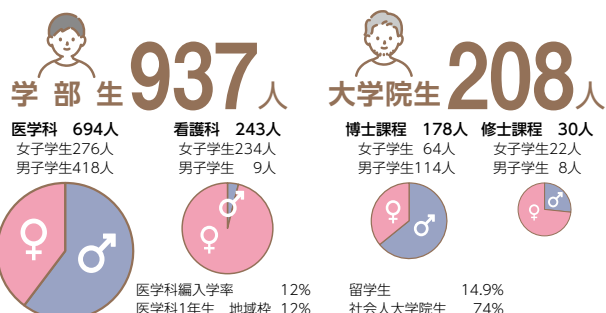


開学

Founded in **1974**

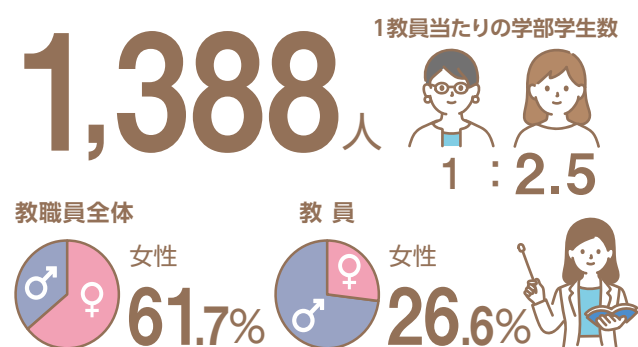


学生数 (2021年5月)



合計 **1,145人**

教職員数 (2021年5月)



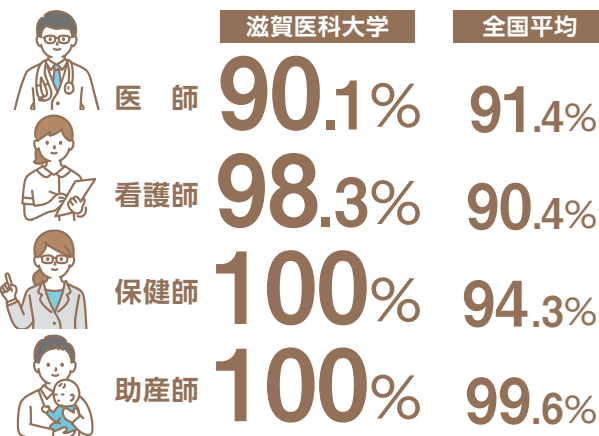
世界大学ランキング日本版2021

Times Higher Education
分野別ランキング
「教育リソース」

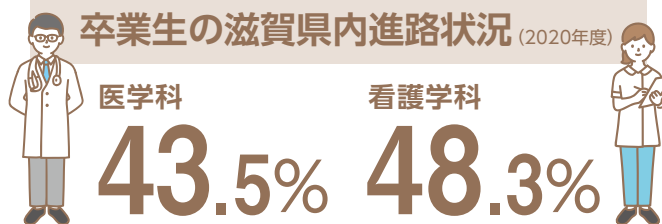


教育リソースは学生一人あたりの資金や教員比率などのデータから、どれだけ充実した教育が行われている可能性があるかを表しています。

国家試験合格率 (2020年度)



卒業生の滋賀県内進路状況 (2020年度)



科学研究費採択率 (2020年度)



教員1人当たりの論文数 (2020年度)



特許の実施許諾率

大学ファクトブック 2021
(一社)日本経済団体連合会



経常収益 (2020年度)

Annual balance sheet



外部資金 (2020年度)



つながる滋賀医科大学

高大連携実績校(2008—2020年) —コロナ禍でもオンラインを通じて連携を継続—

安曇川高等学校
石山高等学校
河瀬中学校・高等学校
光泉カトリック高等学校
膳所高等学校

虎姫高等学校
東大津高等学校
彦根東高等学校
米原高等学校

守山市立明富中学校
立命館守山高等学校
仁川学院中学校(兵庫県)
青翔中学校・高等学校(奈良県)

国際連携(協定締結大学等一覧)

—滋賀医科大学は世界とつながる—



滋賀県内受託事業等の実績(継続含む)

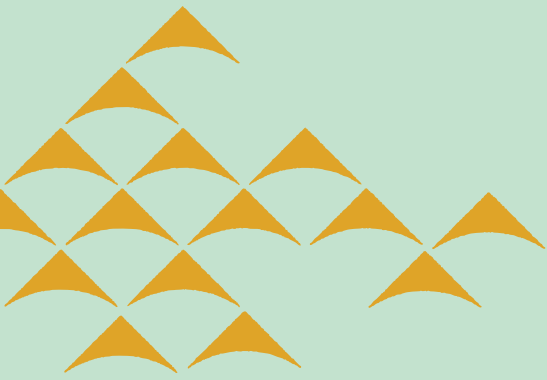
(2020年度)

滋賀県 **21** 件
8,300 万円

市町村 **5** 件
980 万円

新規事業

- 令和2年度新型コロナウイルス感染症の疫学調査事業
- 心不全在宅療養体制整備事業
- 神経発達症・児童思春期医療体制強化研究事業
- 小児がん相談支援体制構築に関する研究
- 思春期健康教育に関する研究
- 予防のための子どもの死亡検証体制整備モデル事業



Ⅲ.滋賀医科大学のミッション 1.教育

明日の医療を担うために

| Missions : Education |





地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、 信頼される医療人と優れた研究者の育成を目指して

松浦 博 理事 副学長(教育・学生支援・コンプライアンス担当)

滋賀医科大学は、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学となることを理念としており、そのために、確かな倫理観、高い専門的知識を有する信頼される医療人や特色ある研究を世界に発信する独創性を有する研究者を養成することを目指しています。これらの目標の実現に向けて、入学試験にも工夫を行い本学のアドミッション・ポリシーに合致した人材を選抜し、適切なプログラムや特色ある取組により、卒前卒後を通してシームレスな教育を行っています。カリキュラムの特徴として、卒業時の到達目標(ディプロマ・ポリシー、アウトカム)を設定してそれに基づき講義、実習、演習などを配置する学習成果基盤型教育を導入しています。具体的には、入学後早い段階から附属病院や地域の医療機関で臨床実習を行ったり、研究室で実験

を開始することができ、これらは学年進行でその内容を高度化していきます。近年、ビッグデータの利活用、バイオインフォマティクス、画像診断、病理診断、ナビゲーションサージェリーなどの最新の医学・医療の分野において、数理、データサイエンス、AIの理論・技術が応用されています。医学部学生が将来医療現場に出たとき、これらの理論・技術を理解し、また活用できると共に、近未来には新しい医療技術を生み出すことも期待されています。今後はこれらのテクノロジーの進化に対応できる能力と幅広い視野を身につけるためにSTEAM教育の導入も行っていく予定です。卒業生の皆さんにはリサーチマインドをもったフィジシャン・サイエンティストとして、地域に貢献する医療人や世界に羽ばたく研究者として活躍していただきたいと願っています。

高い倫理観を礎とした多様性のある医療人の育成

地域に貢献する医療人

- 医看合同教育の推進
医看合同講義・実習を通して、早期から多職種連携の重要性を学ぶ
- 附属病院体験実習・基礎看護学実習 I
附属病院での体験実習を通して、早期から自分の将来像を描く機会を設け、母校愛を育む
- 地域医療教育研究拠点での実習
NHO東近江総合医療センター、JCHO滋賀病院、公立甲賀病院の3か所に活動拠点を設け、地域医療を学ぶ
- 様々な地域医療を担う機関での実習
定期的な訪問診療・看護、老健施設での実習を通して、地域医療、全人的医療を学ぶ

世界に羽ばたく医療人

- 国際基準に基づいた医学教育
日本医学教育評価機構(JACME)による医学教育分野別評価にて認定された、国際基準を満たした医学教育の提供
- 海外留学生の受入
大学独自の予算を設けた海外留学生(大学院生)の受入支援を行い、発展途上国における医療のリーダーを育成
- 海外協定校との連携
医学生の海外自主研修や看護学生の海外研修を通じて、医学・看護学の国際化を推進

世界に発信する研究者

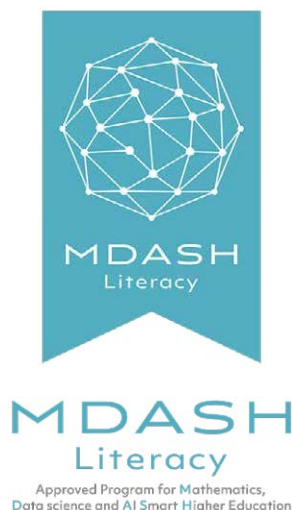
- 基礎医学研究入門 I・II
基礎医学講座での研究活動見学を通じて研究の魅力を学ぶ
- 研究医養成コース
[入門研究医コース]各研究室の見学を通じて本学の研究の特色を学ぶ
[登録研究医コース]興味ある教室に所属し、研究活動、学会発表、論文発表を通じて、研究の魅力を学ぶ
- 海外体験留学の推進・留学先の拡大事業
4割の学生が学生時代に海外研究留学を経験し、世界へ目を向ける姿勢を学ぶ

連続的・段階的な医のプロフェッショナリズム教育

多文化・多様性への理解促進を目的とした教養科目の充実、多職種協働への理解促進を目的とした医看合同講義・実習を積極的に取り入れた教育プログラムを通じて、医療人に要求される確固たる倫理観を養い、「地域に貢献する医療人」から「世界に羽ばたく医療人」、「世界に発信する研究者」まで、多様性のある医療人の育成を目指します。

文理融合型の人材育成を目的としたSTEAM教育の実践

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)に認定



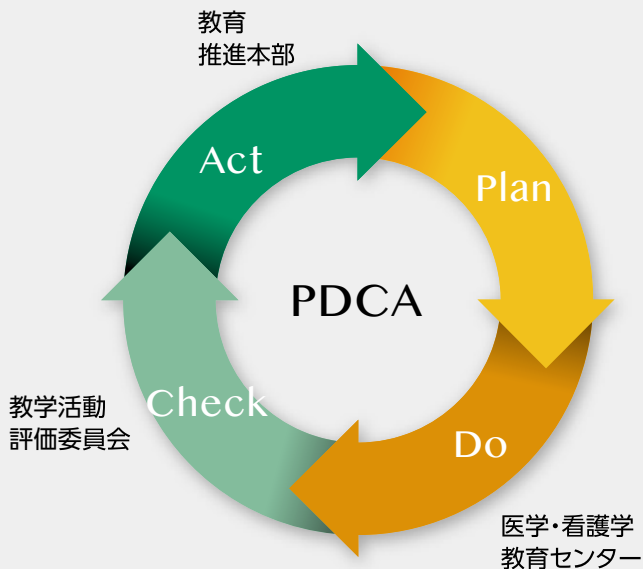
認定期限：2026年3月31日

近年、ビッグデータの利活用、バイオインフォマティクス、画像診断、病理診断など、最新の医学・医療の分野において、数理・データサイエンス・AIの理論・技術が応用されており、これらの理論・技術を理解し、また活用できる医療人の育成が期待されています。

本学では、学部教育において、学生の数理・データサイエンス・AIへの関心を高め、かつ、適切に理解し、それを活用する基礎的な能力を育成することを目的としたSTEAM教育を行っています。

本学の「医療人育成を目指した数理・データサイエンス・AI教育プログラム」が、内閣府・文部科学省・経済産業省の3府省が連携した「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」に認定されました(令和3年8月4日)。今後は、プログラミング実習、画像診断、病理診断、医療イノベーション学習などを授業内容に取り入れ、数理・データサイエンス・AI教育プログラムを充実させることを目指しています。

絶え間ない教育改革の実践

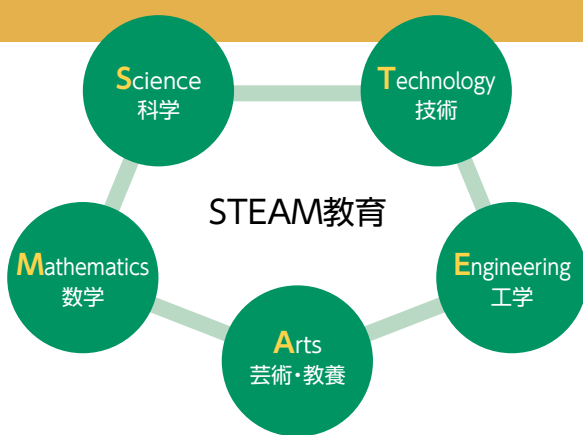


医学・看護学教育のPDCAサイクル

より良い教育システムの構築を目指した継続的な改良

医学・看護学教育で重要なことはPDCAサイクルを回して改革を続けていくことです。本学では、「Plan・Act」を担当する「教育推進本部」、「Do」を担当する「医学・看護学教育センター」、そして「Check」を担当する「教学活動評価委員会」の三つの独立した部門を設置し、継続的かつ健全なPDCAサイクルを回しています。

本学には医学科と看護学科があり、低学年から医看合同での実習を重ねることで、医療現場で不可欠となる「多職種連携」の重要性を学ぶ機会を作っています。



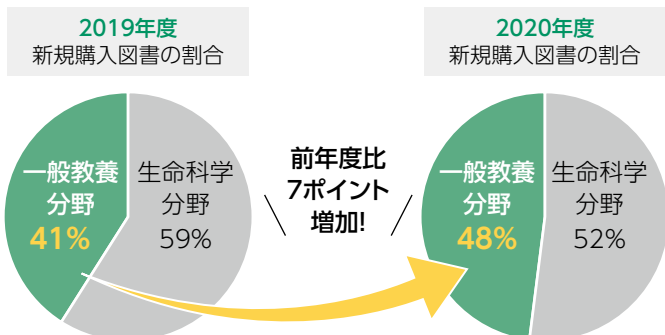
STEAM教育への支援 ～進化し続ける大学図書館～

本学図書館では、STEAM教育支援に向けて教養関係図書の重点的購入を開始しました。

- 教養科目「芸術学」担当教員に選定を依頼し、芸術学分野を補強
 - 学部学生全員を対象にアンケートを実施し、約300冊を購入
- 今後もSTEAM教育関係図書の充実を図り、医学・看護学教育への支援に取り組みます。

この取り組みは国立大学協会広報誌『国立大学vol.60』のウェブページで紹介されています。

(<https://www.janu.jp/janu/report/koho60/60gou/>)



生命科学分野の購入と合わせて全分野の図書をバランスよく購入し、STEAM教育支援を目指します

学生が、勉学の合間にも図書館を訪れ、興味のある分野の本を手に取り、自律的に学ぶ習慣を身につけてもらうことを目的に、学生の意見を蔵書構築に反映させました。

文部科学省 令和2年度 大学改革推進等補助金
「デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン」採択

自律的に学ぶ姿勢を育む個別化教育の推進 —医療人を目指す者の学び方改革—

新型コロナウイルス感染拡大の状況下でも、従来と同様の教育を行うため、令和2年4月より、本学ではデジタルを活用した遠隔授業を取り入れた学修環境の整備を急速に進めてきました。

今回の計画はその延長上にあり、デジタル化を取り入れた高次の学修教材を提供することにより、学生一人一人が自主的に学ぶ個別化教育を推進するものです。

特に動画教材を用いて、学生が授業前に自宅学習することにより、授業では演習や議論を行うなど、より高次の内容を取り扱うことができる授業形態（反転授業）を積極的に取り入れます。



本事業の目的

生涯にわたる自主学修と他者との学び合いを動機づけるために、ICT (Information and Communication Technology) を活用した学修環境を整備すること。

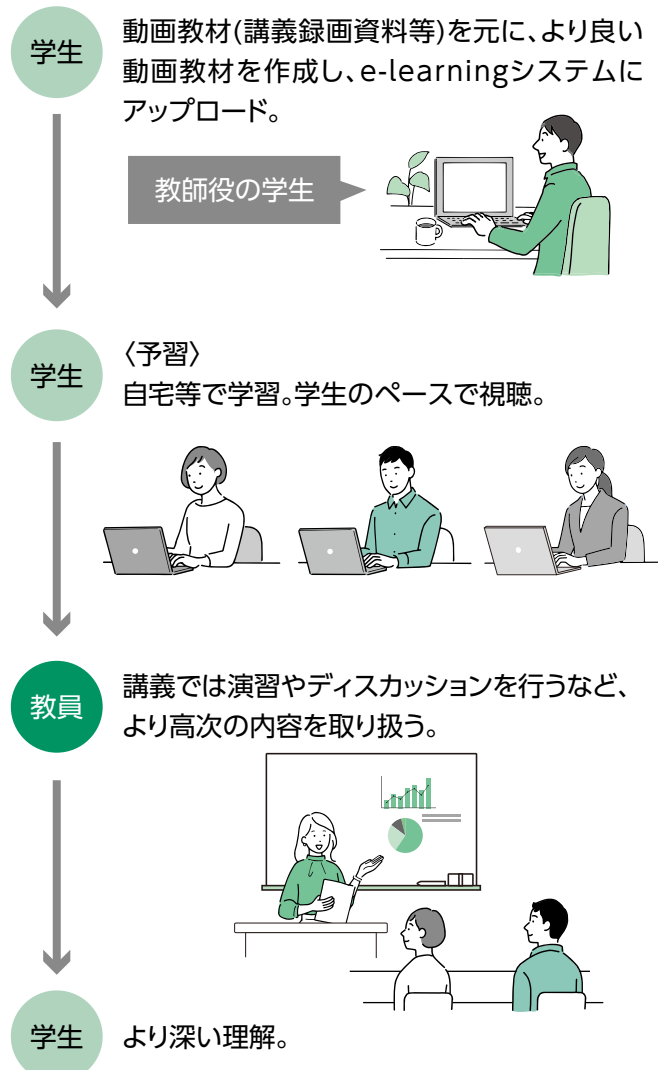
取組内容

01 反転授業 (教師役反転授業)

02 ハイフレックス形式の授業

03 医師国家試験問題と学修教材とをリンク

教師役反転授業とは

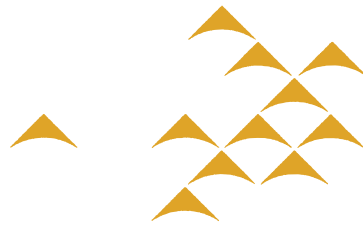


医学科第3学年
永福 大暉

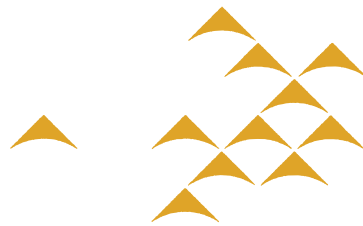


「学びの継続」

「基礎と臨床の橋渡しとなる医師になりたい」。そのような思いを抱き、私は滋賀医科大学を志望しました。そして現在、私は研究室で基礎研究の手法についても学んでいます。昨今は大変な状況が続いていますが、学生皆が各々の「学び」を継続し、深めることのできる環境が整備できれば良いと思います。



在学生の声



地元医療枠: 医学科第2学年
今北 翔子



「私の目標とする医療」

私は自身が高校生の時に受講した本学との高大連携事業において、「医療の究極の目的は人の幸せのため」という言葉に感銘を受け、本学で学びたいと思いました。本学の魅力の一つは全人的医療体験学習だと考えます。患者さんの思いを直接伺い、目標とする医療人像を思い描く機会を頂けたことに感謝しています。

看護学科第2学年
池田 梨乃



「地域に根ざした大学での学び」

私は生まれ育った滋賀の医療に貢献したいと考え、地域医療に力を入れており、県内の医療の先端を担う滋賀医大を受験しました。感染症による制限の中、附属病院の先生による講義や、対面で看護技術演習を受けられる環境に感謝しています。自らの目標に向け、今後もこの大学で多くの学びを得ていきたいです。

保健師課程: 看護学科第4学年
脇坂 理沙



「仲間と志す保健師」

保健師として働きたいと思っていたため、保健師資格が取れて落ち着いた環境で学べる本学を選びました。保健師課程では地域での実習もあり、コロナ禍でも先生方のサポートにより沢山の経験ができました。学生同士の繋がりが強く、仲間に支えられて充実した学生生活を過ごしています。

助産師課程: 看護学科第4学年
久城 実由



「助産師を目指して」

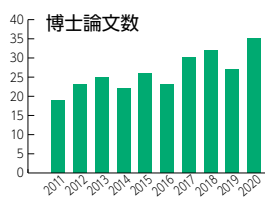
大学の4年間で助産師課程も履修でき、少人数制のため手厚いご指導をいただけることに魅了され入学しました。シミュレータや器材が整った演習室で、臨床に近い環境で学んでいます。コロナ禍ではありますが、助産実習の機会もいただき、勉学に集中できる環境にさせていただいていることに感謝しています。

大学院教育の特徴

大学院医学系研究科博士課程

博士課程においては、豊かな学識と人間性を備え、医学の領域において研究者として自立して創造的研究活動を行うために必要な高度の研究能力を修得し、医学の進歩と社会福祉の向上に寄与する人材を育成する事を目標としています。

本学出身の博士課程学位授与数は累計850名以上となっていますが、ここ数年は海外からの留学生を含めて定員以上で推移しており、滋賀医科大学の未来の担い手として、グローバルな活躍が期待されます。



目指せ、両立

石田 正平 (博士課程 第1学年)

学部生時代にも神経研究の研究室に出入りさせていただき、初期研修後に神経研究や、近年大きく発展してきた脳梗塞急性期治療に興味をいだき、自分の体力に不安を持ちながらも脳神経外科を選択しました。ときに忙しい中でも、実験や研究をしたいという希望を持ち、博士課程と並行しています。自分の時間の使い方が一番解決しなければならない課題と思いつつ、楽しく過ごしています。



神経科学について、もっと多くのことを発見する

Find out more about Neuroscience

ERKHEMBAATAR MUNKHISOYOL
(博士課程 第4学年)

I have been interested in Neuroscience and wanted to gain advanced knowledge as well as to improve my research skills. Therefore I chose SUMS. SUMS provided me with great environment and support by availabilities of advanced research, great experienced professors and international students who can interact with. After completing my Ph.D., I am planning to work at Mongolian National University of Medical Science, which is my home university. It will be a great opportunity to teach younger generation what I have learnt from SUMS.

大学院医学系研究科修士課程

修士課程においては、21世紀における社会の健康問題に関連した多様な要請に対応するため、滋賀県で最初に設置された看護系高等教育機関です。高度で先進的看護サービスを支える確かな専門的知識と看護技術をもつ優れた看護ケアに加えて、研究マインド実践力を兼ね備えた人材を育成する事を目標としています。

本学修士課程修了者が滋賀県の枠を超えて看護学の発展を支えていく事が期待されます。



大学院進学を経て得た、将来の夢

清原 麻衣子 (修士課程 第1学年)

私は本学卒業後、看護師として働いておりました。経験を重ね、自分の看護師としての将来像を考えた時、看護実践のエビデンスを構築できるような専門職者になりたい、と選んだ道が修士課程進学です。今は勉強中の身ですが、将来は研究を通して自分が育った滋賀県の健康に寄与できたら、と考えています。現在の目標は修士課程修了ですが、その後は博士号取得も視野にキャリアビジョンを検討しています。



大学院生活を振り返って

磯野 みなみ
(修士課程 令和3年3月修了)

大学院では、様々な専門領域の経験豊富な方々とディスカッションをする機会が多く、新たな視点の学びを得ることができました。また、大学院での学びの楽しさは、研究を通して自分が明らかとしたい疑問について追及できる点だと思います。卒業後の現在も看護研究に取り組んでおり、今後も新たな知見を臨床の看護に還元していきたいと思っています。

文部科学省基礎研究医養成活性化プログラム

「地域で活躍するForensic Generalist, Specialistの育成」

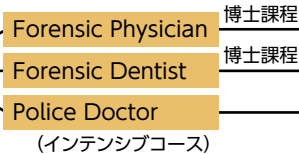
児童虐待相談件数の増加や、コロナ禍を含む大規模災害時の医療活動などに対応するために、法医学の知識・技能を有する医療者を育成する事は重要な課題です。滋賀医科大学を拠点とした基礎研究医養成活性化プログラムが令和3年に採択され、地域との強固な連携により死因究明などに関する優れた能力を有する人材育成を推進します。



教授 一杉 正仁

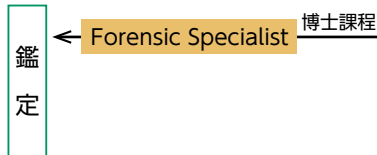
【法医学の知見・能力を活用できる実地医家】

- ◆死体検案・身元確認
- ◆被虐待児・高齢者の診察
- ◆犯罪被害者・家族の心身ケア
- ◆大規模災害時の医療活動
- ◆矯正医療



【死因究明等に関する優れた知識・技能を有する専門家】

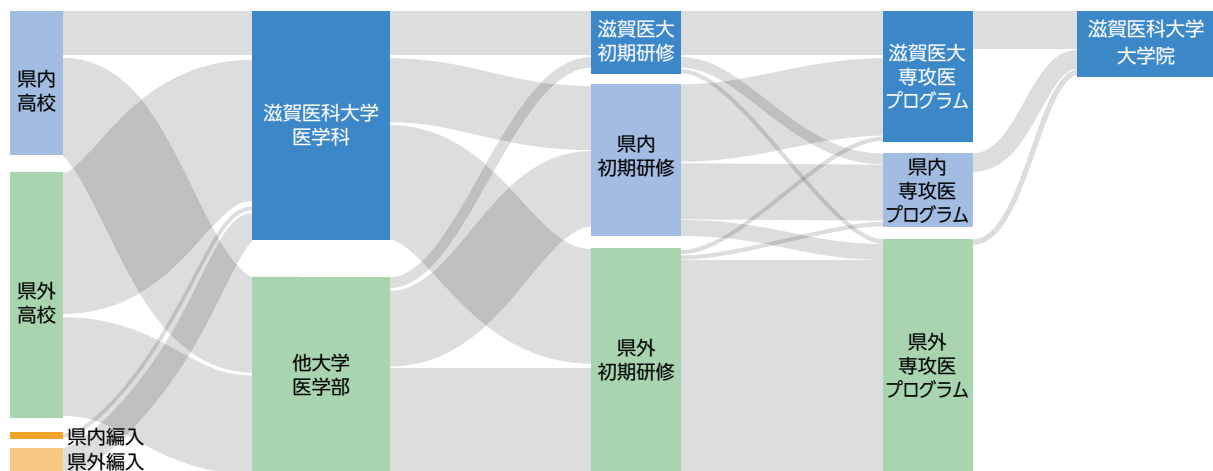
- ◆法医解剖
- ◆法医画像診断
- ◆生化学・薬毒物検査
- ◆病理組織学的検査
- ◆DNA解析・個人識別
- ◆事故再現 (FEモデル)



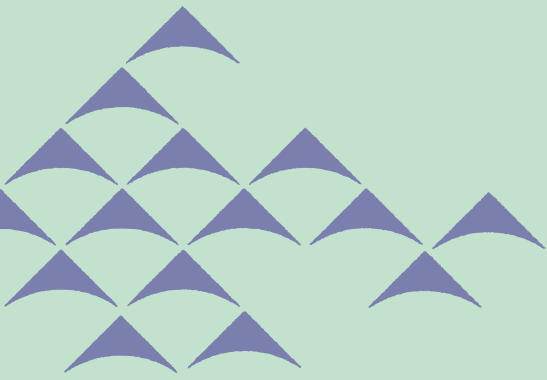
先進的・特色ある取り組みに基づく教育

外因死遺族への心のケア相談窓口 (滋賀医)	性暴力被害者総合ケアワンストップ (滋賀県)
子どもの死因究明体制整備モデル事業 (厚労省→滋賀医・京府医)	戦没者慰霊事業におけるDNA鑑定 (厚労省→大阪医)
近畿地区の矯正医療 (法務省大阪矯正管区→滋賀医)	交通事故死者データベースによる予防対策の推進 (滋賀医)
死体検案研修会見学実習 (日本医師会→滋賀医・京府医・大阪医)	医師による遠隔からの死亡診断をサポートする看護師研修 (厚労省・文科省→京府医)

学部卒業後も初期研修・専攻医・大学院を通じて学びと成長の場を提供



医学部医学科入学生の約2割が滋賀県出身者で年々増加しています。医学部卒業生の約2-3割が滋賀医科大学附属病院で初期研修を行います。また、約3割が滋賀県内で初期研修を行い、他大学出身者を合わせて100名以上が滋賀県内で初期研修を行っています。滋賀医科大学専攻医プログラムには附属病院初期研修医の約7割(22名)が登録し、県内外で初期研修医を行った34名を合わせて50名以上が本学の専攻医プログラムに入っています。大学院に入る時期は様々ですが、他大学出身者を含め毎年30名の博士課程進学者があり、論文博士を加えると、毎年30名以上の医学博士授与を行っています。 ※上図は医学部を例にして、本学の一貫した教育イメージを表しています。



Ⅲ.滋賀医科大学のミッション 2.研究

全ての人の健康のために
| Missions : Research |





優れた研究による人類社会・現代社会の課題解決への挑戦 —本学の研究のミッション—

遠山 育夫 理事 副学長(研究・企画・国際担当)

滋賀医科大学は、創造 (Creation)、挑戦 (Challenge)、貢献 (Contribution) の3Cを三大使命として掲げています。このうち、挑戦 (Challenge) は、優れた研究による人類社会・現代社会の課題解決への挑戦であり、本学の研究における重要なミッションと位置づけられます。

この使命のもとこれまで本学は、サルを用いた医学研究、神経難病研究、生活習慣病疫学研究などを重点領域研究と定め、特色ある研究の育成と優れた研究成果の発信に務めてきました。今後は、優れた研究成果の発信にとどまらず研究成果の実装化による社会の課題解決への挑戦に歩みを進めるべきと考えます。そのためには企業との連携が極めて重要であり、産学官金の連携を強化していきたいと

考えています。ただし、研究成果の実用化は一朝一夕にできるものではないのも事実です。実用化など考えてもいなかった基礎研究から、優れた製品や新たなイノベーションが生まれることも多々あります。

10年、20年の長期的視野にたって純粋に知的好奇心によって行われる基礎研究は、企業ではなく国立大学でこそ可能な分野であると考えます。そこで、若手を中心にした創造的・挑戦的研究を支援し、育てていくことを研究の第2の柱にしたいと考えています。将来、そうした研究が実り、大きなイノベーションを起こすことを夢見ながら応援していきます。

特色ある4つの重点領域 —びわ湖のほとりから世界に発信

From SUMS Towards the World

「滋賀医科大学に行けば、この研究ができる」個性と特色のある研究を！
～何でもできる大学を目指すのではなく、これができる大学を目指す～

サルを用いた医学研究

世界的にも希有なカニクイザルの人工繁殖技術を有し、先端的な遺伝子改変技術を用いた疾患モデルザルを作成し、病態の解明と新規診断・治療法の開発に取り組んでいます。また、高レベルの感染実験が可能な施設である利点を活かし、新型コロナウイルスに感染させたカニクイザルを用いて、ワクチンや治療薬の開発も行っています。京都大学の推進する世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)のサテライト施設として、霊長類固有の遺伝子機能の解析・難病モデルの作出を推進するなど、国内外の研究機関との共同研究も推進しています。

動物生命科学研究センター長 等 誠司

当センターでは、新規の遺伝子改変カニクイザル作製技術の開発*に取り組むとともに、げっ歯類では再現困難なヒト難病モデルザルを作製・解析し、研究成果を世界に発信しています。また、学内外の霊長類研究を積極的に支援しています。



教授
依馬 正次



助教
仲山 美沙子

ヒトに近い動物モデルであるカニクイザルを用いて、新型コロナウイルスや高病原性鳥インフルエンザウイルスの病原性評価、ワクチンや治療薬の効果検証を行っています。臨床応用を目指したやりがいのある研究です。

*動物実験認定制度により、動物の生命倫理に深く配慮し実施しています。

認知症をはじめとする 神経難病研究

アルツハイマー病や筋萎縮性側索硬化症など神経難病の分子病態解析を進めています。国からのトップダウン型研究費を獲得し、海外の一流大学との共同研究や交流を行いながら、遺伝子工学・分子生物・細胞生物学的手法や形態学的手法において最先端の方法論を導入し、モデル動物の作出やバイオマーカー開発、創薬から治験まで、基礎と臨床を融合した研究体制を構築して、シーズ発掘から臨床応用までのオリジナルな研究に取り組んでいます。

神経難病研究センター長 西村 正樹

神経難病の中でもとくに神経変性疾患は病因不明、治療不能が特徴とされるほどでしたが、分子病態の理解が進んだ現在、新たな分子標的治療の開発が精力的に進められています。そのなかで、我々は独自のアイデアから道を切り開くパイオニアを目指しています。



センター長・教授
西村 正樹

助教
中野 将希

脳老化と認知症の関連に興味があり、これを分子レベルで解明し新たな治療標的を開拓することから予防や治療法の開発に貢献したいと考えています。興味深い研究テーマに取組み、恵まれた研究環境のもと切磋琢磨する充実した毎日です。

生活習慣病疫学研究

非感染性疾患 (NCD) に関する多様な疫学研究を通して、生活習慣病や認知症の原因究明や予防法確立のための研究を行っています。厚生労働省指定研究 NIPPON DATA、滋賀動脈硬化疫学研究 SESSA、国際共同研究 INTERMAP などの研究を進めています。2013年度から2019年度に実施した博士課程教育リーディングプログラム「アジア NCD 超克プロジェクト」では、アジア地域の疫学リーダーとなるべき人材を多数輩出しました。

NCD 疫学研究センター長 三浦 克之

疫学研究は10年、20年と継続することにより価値の高いエビデンスを生みます。わが国有数の疫学研究拠点である本学からのエビデンスは、国の政策立案や世界の医学の進歩に大きく貢献しています。



センター長・教授
三浦 克之

特任助教
岡見 雪子

生活習慣病は、その名の通り長年の生活習慣が蓄積して発症します。発症に繋がる危険因子あるいは予防因子を発見し、病気を未然に防ぐこと（一次予防）を目指して研究しています。栄養に関連するメタボロームの研究も進めています。

先端がん研究

大学の「知」と「人材」を結集し、がん医療開発に資するため、先端がん研究センターを設置しています。基礎・臨床医学の融合を図り、アカデミア発のシーズ育成と橋渡し研究を活性化し、附属病院での先進的がん医療の実践と先端がん治療研究を牽引する人材養成を行うことが目的です。先端がん研究センターを中心に、基礎と臨床の融合研究を推進し、基礎研究の成果を臨床応用することで、がんの克服を目指しています。

先端がん研究センター長 醍醐 弥太郎

当センターでは、国内外の学際的共同研究や若手研究者を受け入れており、各種モデル動物やヒト生体試料を用いて、がんの発生・進展のメカニズムの解明に最先端の分子解析で迫る研究や画期的ながんの診断・治療法の開発に取り組んでいます。



センター長・教授
醍醐 弥太郎



リサーチアシスタント
TSEVEGJAV BAYARBAT
(ツェベグジャブ バヤルバット)

素晴らしい研究施設、多様な人材と他研究機関との協力体制が充実していることから先端がん研究センターでの研究を志しました。がん増殖に関わる分子の機能解明に向けた研究を行っており、本学発の新規抗がん薬の開発を目標としています。

若手研究者と女性研究者の支援

若手研究者の自由な発想や独創的研究を育てていく体制

若手萌芽研究

学長裁量経費による研究助成です。

1件100万円以内30件以内で募集をしています。こちらは、科研費応募資格を有する本学の常勤教職員及び大学院生で、教授、准教授、講師は対象外となっています。



2020年度 若手研究 採択
母子診療科 医員 北澤 純

慢性子宮内膜炎という子宮内膜の炎症性疾患が着床障害を引き起こす原因として、子宮内膜のヘルパーT細胞の変動が関連していることを解明しました。大学からの支援で充実した研究生活を送ることができ、大変感謝しています。



2020年度 基盤研究C 採択
臨床看護学講座(小児看護学) 講師(学内) 白坂 真紀

学長裁量経費や支援員配置の援助を受け、病気をもつ子どもと家族への支援に関する研究を続けています。最近、子どもの成人移行期に焦点をあて調査しています。子どもたちが健やかに成長することを願っています。

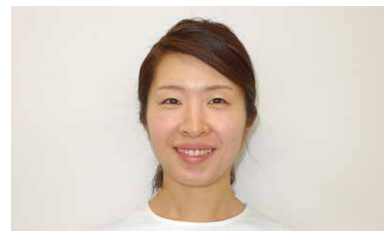
研究費申請アドバイザー制度

本制度は、研究戦略推進室に所属するコーディネーターやユニバーシティー・リサーチ・アドミニストレーター(URA)が研究費申請書をブラッシュアップするサービスです。ブラッシュアップは、採択率の向上を目指す制度で、研究の内容やアイデア自体は研究者のオリジナリティーを尊重します。



2020年度 若手研究 採択
歯科口腔外科 医師(非常勤) 村上 翔子
(淡海医療センター勤務)

「がん細胞を立体的に培養できる3D培養法を用いた舌がんの代謝解析」の研究助成に採択頂き感謝申し上げます。病態の解明や創薬に繋がるこのようながん研究の一端に携われて貴重な経験でした。研究手法を習得し実験の幅が増えて大きな収穫を実感しています。



2020年度 若手研究 採択
臨床看護学講座(成人看護学) 助教 炭本 佑佳

「研究者のための支援員配置」を利用し、支援員に文献検索やデータ入力などをサポートしてもらい、じっくりと研究構想を練ることができました。科研費の採択にも繋がり、育児と両立しながら充実した研究活動を行うことができています。

滋賀医科大学がサステナブルでアトラクティブな大学であり続けるために、若手研究者の活躍が必須です。滋賀医科大学では若手研究者の活躍を支援するための事業として、学長裁量経費による研究助成、科研費申請アドバイザー、科研費奨励研究助成などを実施してきました。また、**出産・育児・介護中の研究者を支援する仕組みがあります** (P.53参照)。今後もこれらを継続し、彼らの純粋な知的好奇心によって行われる研究を、支え発展させていきます。

研究医養成コース



学生の主体的な探究活動をサポートしながら、研究活動の場を提供する入門研究医コースへの参加を医学科第5学年まで広く募り、入門研究医コースにつづく登録研究医コースとして、キャリアパスの異なる4つの専攻(分子医科学、病理学、法医学、公衆衛生学)を選択できるようにしました。学部から大学院までシームレスに研究活動を発展させ、研究医を従来よりも早期に養成することを目指しています。



医学科第6学年 景山 裕介

3年前期より、遠山副学長の教室でアルツハイマー病発症に関係する毒性アミロイドの研究を行っています。研究医コース諸先生からご指導賜り、2021年9月に筆頭著者として米国化学会学術誌に研究論文を発表しました*。

*プレスリリースを行いました。 <https://www.shiga-med.ac.jp/sites/default/files/2021-08/20210830press.pdf>



医学科第4学年 松井 温哉

生命科学講座(物理学)にて、物理的手法による amyloid- β の立体構造の解明に取り組んでいます。ビジネスコンテストでのプレゼン・特許取得等も経験してきました。物理学から医学へのアプローチは刺激的なアイデアに満ちた分野です。

女性研究者賞

この賞は、女性研究者の優秀な研究活動を表彰し、本学の研究活動を活性化することを目的としています。毎年1名を選考し、学長より滋賀医科大学女性研究者賞受賞者を表彰し、賞状及び副賞を授与します。



2020年度 女性研究者賞受賞
外科学講座 講師(学内) 貝田 佐知子

大学院から現在まで携わる研究として、高分子ミセルを用いたドラッグデリバリーシステム開発があります。また臨床ではロボット支援下胃切除の導入に携わり、胃癌手術をさらに低侵襲かつ根治性の高い手術にすることが目標です。

産官学金連携

〈産=企業、官=政府・地方公共団体、学=大学・研究機関、金=金融機関〉



研究戦略推進室 産学連携推進部門 部門長・特任教授 松浦 昌宏

産官学金連携活動を通じて、地域の企業様のお役に立ち、地域産業の振興に貢献したいと考えています。そのためには、地域の企業様のご要望等を真摯に受け止め、共に考え、ここ滋賀県・近江商人の理念である「三方よし」を実現できるようにしていきたいと思えます。

最近の2年間は新型コロナウイルス禍により、色々な制限があって十分な活動ができていませんが、滋賀医科大学は国立大学法人として令和4年度から始まる6年間の第4期中期目標・中期計画の策定・実施にあたって「地域産業への貢献」を掲げており、これまで以上に企業様の目線に立った産官学金連携活動を進めていきますので、是非、ご理解・ご支援をいただきたくお願いいたします。

SUMS EDGE-NEXT これまでの成果

文部科学省2017年度次世代アントレプレナー育成事業(EDGE-NEXT)に、早稲田大学を主幹校とし、滋賀医科大学、東京理科大学、山形大学を協働機関、多摩美術大学ほか31機関を協力機関とするコンソーシアム「EDGE-NEXT人材育成のための共創エコシステムの形成」(Skyward EDGE)が採択されました。

滋賀医科大学は、この前身のプログラムも平成26年度に単独で採択され、iKODEプログラムと称して医工連携に特化したEDGEプログラムを3年間実施してきており、計8年間、アントレプレナーシップ教育やイノベーション教育に取り組んできました。

この間にプログラム受講生を多数輩出し、滋賀県発成長産業・育成コンソーシアムが主催する「滋賀テックプランングランプリ」に6年連続で受賞者が出ています。これを契機として、更なるイノベーション人材の育成を進め、産学連携活動を活性化し、地域産業の発展に貢献したいと考えています。



異業種企業学内展示会

産学連携活動の一環として、金融機関の紹介で研究シーズ等の説明に訪れた地元の企業経営者の方との会話の中から生まれた「異業種企業学内展示会」を実施しています。

きっかけは、地元企業側のニーズとして、医療現場を知る医療従事者(医師、看護師、技師等)との接点が持ちたいということでした。よく考えてみると、少なくとも大学教員を兼ねる医師は学術的な学会に併設される企業展示会には足を運ぶ機会がありますが、病院勤務の方たちは、積極的に企業展示会を訪問して企業の方と話をすることは少ないように思われました。また、医師(研究者)も出席する学会はそ

の専門性と関連した企業展示に限定され、全く分野の違う企業の製品や技術に触れる機会がないということにも気づきました。逆も真なりで、企業の方も分野の違う医療には漠然と関心があっても接点がないことも理解できました。

そこで、前述の企業経営者の方から、「実は医療とは分野が違うが、鉄鋼業界の現場では同じようことが生じており、自分達は現場まで足を運んで、説明会等を実施している、医療の分野でも現場(病院)に企業が足を運んで展示会をするようなことをしてもよいのではないかと」との提案を受けたことを実現してみようと考えました。

産官学金連携

企業と大学のマッチングをコーディネートし、大学の研究成果を実用化する活動として、以下のような活動を行っています。

大学で創出された
知的財産(研究シーズ)を企業に紹介し、
それを実用化する活動

01

谷徹特任教授のマイクロ波を利用した手術機器の開発が進行中!

附属病院内での医療現場の
ニーズ(医療ニーズ)を企業に紹介し、
それを実用化する活動

02

各種展示会への出展や病院内展示会を開催

03

金融機関や支援機関との連携

04

知的財産の発掘・出願・維持・管理、研究シーズや
医療ニーズの聞き取り調査、展示会での説明など

05

研修会に参加して一定の基準を満たすと認定した銀行員を本学の認定コーディネータとし、地域企業との連携(企業経営者等を紹介いただき、共同研究等を推進)を進めています。

産官学金連携に向けたデュアルアプローチ

研究シーズからのアプローチ

研究成果、アイデア

特許(ノウハウ)

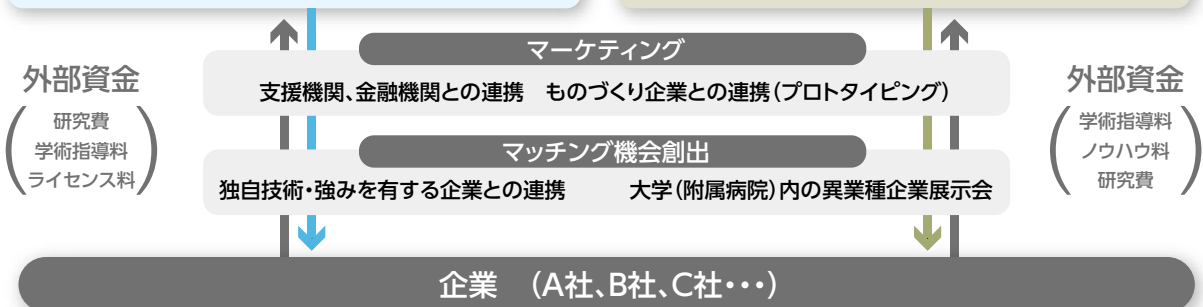
学会発表、論文

医療ニーズからのアプローチ

現場観察、業務改善

課題の顕在化

医療ニーズの発掘



第1回目は2019年11月に附属病院内で実施し、この種のイベントとしては珍しく非常に多くの学内関係者(約70名)が参加し、現場の医療従事者は熱心に企業の方との会話(面談)を楽しんでいるようでした。企業の方には共同研究につながる提案をしていただき、その後、共同研究や学術指導に発展した事例もありました。

昨年は新型コロナウイルス禍もあり、延期せざるを得ませんでした。今年は細心の注意を払い、2021年11月に滋賀県産業支援プラザとの共催で実施しました。今回も多くの学内関係者(約50名)が参加したので、化学反応が起こって産学連携につながることを期待しています。



企業の技術シーズと医学研究者のアイデアがマッチングした製品

がんの病態解明や創薬研究に必要なとされる3次元培養の開発に関して、日本バイリン株式会社と滋賀医科大学医学・看護学教育センター 向所賢一教授他との共同研究から生まれた“Tissueoid cell culture system (組織模倣型細胞培養システム)”。当初の企業の製品化アイデアを研究者が聞いて、別の発想から生まれた製品です。国内外の特許も取得および出願中です。

*本研究に関して、2021年3月4日にプレスリリースを行いました。
https://www.shiga-med.ac.jp/sites/default/files/2021-03/20210304pressrelease_0.pdf

多層シート状の新しい3次元細胞培養！

セルベッド®
Cellbed 高純度シリカファイバー細胞培養担体

Cellbed® 24 ウェルプレート

シリカファイバー
(繊維径約1 μm)

15 μm

3次元培養細胞の観察・浮遊細胞の簡便な標本作製に！

Cellbed® 染色ホルダー

Cellbed 染色ホルダー

適合担体:
Cellbed 12 ウェル用担体 (90%)

医療現場のニーズに応じた医療機器品目の追加

日機装株式会社と滋賀医科大学寄附講座(革新的医療機器・システム研究開発講座)の谷徹特任教授他との共同研究から生まれたマイクロ波を応用した革新的な医療機器に、鏡視下用品目が追加されました。マイクロ波の特徴(ミストが出ない、組織が焦げない、止血が容易)を最大限生かせる機器として販売されています。

2017、夏上市

Acrosurg. (Scissors)

2020、夏上市

直視下手術用(パーム)

Acrosurg. (Tweezers)

Generator

鏡視下手術用(レボ)

マイクロ波手術支援機器

研究活動を支援する体制

研究データのトレーサビリティ Gakunin RDM活用開始

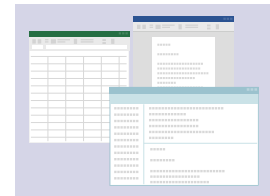
研究データのトレーサビリティ(履歴を残し、追跡ができること)や学術雑誌を通じた生データの提供は、研究不正の防止のみならず、研究者同士のデータ活用により科学の発展に寄与すると考えられています。本学では国立情報学研究所による研究データ管理システムを導入し、情報管理のみならず、学外との共同プロジェクトの発展を支援しています。保存されたファイルにはタイムスタンプを用いた証跡管理機能を有する事から、データの質保証と機関のデータガバナンスに有効であると考えています。

研究データ共有・管理機能

大学の個人IDとパスワードによる認証とグループ管理でデータ共有



研究証跡の保存機能

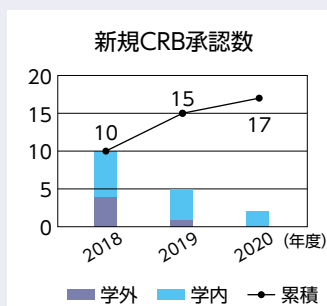


時刻認証事業者のタイムスタンプである時刻のファイルの存在を証明



特定臨床研究と倫理審査室

研究活動統括本部倫理審査室では2018年に施行された「臨床研究法」に基づき、特定臨床研究に関する審査意見業務を行う「認定臨床研究審査委員会(CRB)」、「再生医療等の安全性の確保等に関する法律」の施行に伴い、第1種から3種までの再生医療の提供にかかる審査を行う「特定認定再生医療等委員会」及び「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」で定める「倫理審査委員会」の3つの委員会を運営しています。2008年に“原則、自機関への倫理審査委員会の設置義務”が解除されて以降、委員会の集約化が進められていることをふまえ、本学ではいずれの委員会でも、学外の様々な研究機関からの審査を受託しています。2018年以降の特定臨床研究の状況を下図に示します。滋賀県下で13の特定臨床研究が現在実施中です。法の該当性の判断について相談できる窓口も開設しています。



治験と臨床研究開発センター

臨床研究開発センターは研究マネジメント、知財管理、研究実施支援、データマネジメント、生物統計家による支援など、治験、先進医療、臨床研究の推進に必要な様々なスペシャリストが所属し、業務に当たると共に人材育成も行っています。

2020年までの企業治験及び医師主導治験の実施状況を下表に示します。コンスタントに新規治験が増加し多くの治験が継続して実施されています。先進医療に関しても、新規案件の増加に取り組んでいます。

生物統計家へのニーズは極めて高く、年々相談件数が増加しており増員を行っています。

企業治験及び医師主導治験の件数推移

	2021/3/15現在			
	新規		継続	
	企業	医師主導	企業	医師主導
2013年度	13	1	33	1
2014年度	13	0	25	1
2015年度	11	0	28	0
2016年度	5	1	26	0
2017年度	21	4	25	1
2018年度	12	1	27	3
2019年度	14	0	37	5
2020年度	14	0	40	1

(単位: 件)

先進医療件数

	2021/3/15現在	
	新規	継続
	2013年度	2
2014年度	1	5
2015年度	1	6
2016年度	1	6
2017年度	1	4
2018年度	1	3
2019年度	2	1
2020年度	0	2

(単位: 件)



Ⅲ. 滋賀医科大学のミッション 3. 臨床

命と向きあうために

| Missions: Clinical Practice |





社会の変化と私たちのビジョン： コロナ禍元年と働き方改革前夜

田中 俊宏 医療・財務・労務担当理事・病院長

優れた医療人の育成と医療の高度化という、滋賀医科大学医学部附属病院に課された使命を果たすためには「成長」がキーワードになります。これは一貫して変わらない本学の姿勢です。しかし、今回の報告書には世界中が見舞われたコロナ禍についての言及を避けることができないと考えますので、滋賀医大のコロナ奮闘記を初めに紹介します。重症患者を、しかも広域から受け入れていることがお分かりだと思います。コロナ禍にあっても、SCU(脳卒中集中治療室)や精神科の病床削減と個室化など、病院の掲げる高度な医療の提供が倦まず弛まず進んでいる事が端的に現れるページです。同時に病院の全部門が協力しあってコロナ禍に立ち向かう姿もまた浮かび上がると思います。次に、社会的に大きな影響を持つ、法律の改正に伴う働き方改革について滋賀医大の考えている対応策を紹介します。

具体的には、「医師の働き方改革」と言われているように医師の長時間労働の是正のための法律への対応です。これに一番大切なことは、医師を含んだ医療者の意識改革なのですが、精神論だけでは乗り切れないと考えております。医師一人当たりの労働時間が減るので、それに相当する高度医療を提供する医療従事者が必要であって、それを特定行為研修看護師に担ってもらおうと考えております。視点を変えれば、看護業務の拡大と能力の成長です。

最後に、数字や考え方だけではなく、人柄も合わせてお知らせできるように、本学の診療科長を一人紹介します。今回は、心臓血管外科を率いる鈴木教授です。昨年と同じく、「持続可能な病院であるか？」は大切な問いです。締めくくりは病院の財務状況をお示しします。

コロナ禍元年とコロナ奮闘記

「コロナに感染していても、していなくても、重症患者はお引き受けします。」

新型コロナウイルス感染症が拡大し、複数回の波となって地域社会に急速に広がりました。滋賀医科大学は滋賀県や他の医療機関と連携して、大学全体で新しい感染症に対応しました。専門スタッフを派遣し、専門の診療チームを結成し、ワクチン接種事業を推進し、着実に成果をあげてきました。ここに記すのは、刻々と変化する状況の中で、「走りながら考える」ことを実践してきた記録です。

新しい感染症との戦いは、短期間のうちに私たちの生活を一変させました。考えてみると、変異ウイルスや自然災害など、健康や安全を脅かすものは新型コロナウイルスだけではありません。感染拡大を防ぐために導入した取り組みやルールが十分な効果を挙げたのかどうか、検証してさらに有効な対策となるよう改善し続けることが、これからの課題といえます。

専門スタッフの派遣

■滋賀県新型コロナウイルス感染症対策協議会に 病院長と感染制御部長が参加

2020年4月に設置された滋賀県新型コロナウイルス感染症対策協議会で、感染症対策にかかる施策について助言しました。

■クラスター発生施設等への専門スタッフの派遣

厚生労働省からの委託を受け、日本環境感染学会が実施する「感染制御支援チーム (ICT) 派遣事業」において、当院感染制御部長が滋賀県のチームリーダーとなり、県内の患者クラスターが発生した施設等へ、インфекション・コントロール・ドクター (ICD) の資格を有する専門医1名とインフェクション・コントロール・ナース (ICN) の資格を有する看護師14名 (延べ人数) を派遣し、治療に関する助言やゾーニングの指導などを実施しました。

■DMAT (災害派遣医療チーム) の派遣

DMATとは、医師・看護師・業務調整員等で構成され、大規模災害や事故などの際に現場に急行する医療チームです。滋賀医科大学は複数のチームを有しており、新型コロナウイルス感染症対策でも活動しました。滋賀県に設置されたCOVID-19災害コントロールセンターでは、県内の新型コロナウイルス感染患者の入院調整や搬送調整業務に従事しました。患者クラスターが発生した施設にもDMATを派遣し、濃厚接触者からの検体採取や宿泊療養施設への入所調整を行い、クラスターの早期収束に貢献しました。また、滋賀県が設置した「滋賀県見守り観察ステーション」にもDMATを派遣し、運営を支援しました。

■大阪府および兵庫県への看護師派遣

感染拡大のために医療体制がひっ迫した大阪府および兵庫県に対して、2020年12月から2021年6月までの期間に看護師4名を派遣しました。

ワクチン接種事業にスタッフを派遣して協力

■大規模接種会場へのスタッフ派遣

滋賀県からの要請で、地域の医療従事者約1,000名を対象に集団接種を実施しました。滋賀県広域ワクチン接種センターへ医師578名 (延べ人数) を派遣しました。大津市の集団接種事業には、医師577名、看護師685名、薬剤師68名 (いずれも延べ人数) を派遣しました。

■滋賀大学へのスタッフ派遣

滋賀大学の大学拠点接種 (職域接種) に、医師6名を派遣し、滋賀大学の学生と教職員約1,500名への接種を支援しました。





患者およびPCR検査の受け入れ

■他医療機関・他府県からの新型コロナウイルス感染症患者の受け入れ

滋賀県COVID-19災害コントロールセンターと緊密に連携し、重症患者を中心に他施設からの転院受入要請に対応しました。本学附属病院で受け入れた患者の9割以上が、他施設からの転院でした。これらの重症患者に対応するため、新型コロナウイルス感染症に対応できる病棟を設置しました。特に、本学附属病院は妊婦・小児のハイリスク患者の受入フローの県内最後の砦となっています。また、患者さんは県内からだけでなく、医療体制がひっ迫した他府県からも受け入れました。

■PCR検査の受け入れ

滋賀県からの要請に応じて、2021年10月までに2,000件以上のPCR検査を実施しました。

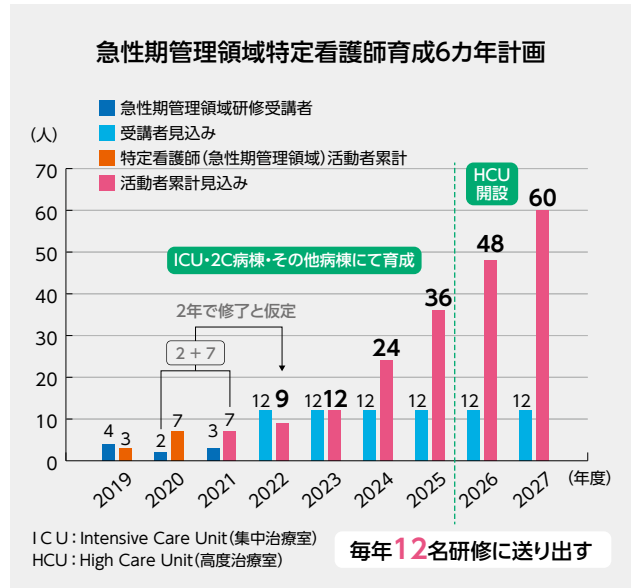
滋賀県の状況		本学附属病院の対応状況
	2020年1月	新型コロナ対応マニュアル作成
	2020年2月	面会制限
県内初陽性者	2020年3月	個人防護具、環境消毒剤等供給減少への対応 原則面会禁止
県内初死亡例 緊急事態宣言発令	2020年4月	院内職員に対し、個人防護具(ゴーグル)配布 消化管内視鏡検査を制限 職員への新型コロナに関する情報提供メール配信開始 院内でのPCR検査開始 新型コロナウイルス感染症重点医療機関に指定 当院で初めてコロナ患者さんを受け入れ コロナ治療チーム結成 DMAT派遣(滋賀県COVID-19災害コントロールセンター、滋賀県内の宿泊療養施設の設置)
現状を警戒ステージと位置づけ	2020年5月	感染制御部増員(医師2名、事務員1名) 滋賀県の実施するPCR検査の一部を受託開始
注意ステージに引き下げ	2020年6月	手術前患者に対する全例PCR検査開始
警戒ステージに引き上げ	2020年7月	
	2020年8月	県下クラスター発生時にDMAT派遣
	2020年9月	玄関での発熱トリアージ開始
「滋賀らしい生活三方よし」ステージ(ステージ1)へ 注意ステージ(ステージ2)に引き上げ	2020年10月	玄関の夜間休日閉鎖開始
	2020年11月	
(大阪府がレッドステージ1に移行)	2020年12月	大阪府へ看護師2名を派遣 「感染制御支援チーム(ICT)派遣事業」において滋賀県チーム リーダーとなり、ICD、ICNを派遣
警戒ステージ(ステージ3)に引き上げ	2021年1月	入院患者に対する全例事前PCR検査開始
注意ステージ(ステージ2)に引き下げ	2021年2月	
	2021年3月	
ワクチン接種開始 警戒ステージ(ステージ3)に引き上げ GW緊急対応を発表 (東京、大阪、兵庫、京都に緊急事態宣言発令)	2021年4月	職員に対するワクチン接種(医療従事者等への優先接種。地域の医療従事者含む) 大津市ワクチン接種事業へ職員派遣(～10月) 大阪府へ看護師1名を派遣 大阪府からの重症患者受け入れ
	2021年5月	兵庫県へ看護師1名を派遣
	2021年6月	
注意ステージ(ステージ2)に引き下げ 滋賀県広域ワクチン接種センターを設置	2021年7月	滋賀県広域ワクチン接種センターへ医師を派遣(～11月)
ステージ2→ステージ3→ステージ4 まん延防止等重点措置 滋賀県見守り観察ステーション設置(～9月) 緊急事態宣言発令	2021年8月	滋賀大学大学拠点接種に医師を派遣(8,9月)
警戒ステージ(ステージ3)に引き下げ	2021年9月	滋賀県見守り観察ステーションにDMATを派遣
注意ステージ(ステージ2)に引き下げ	2021年10月	

コロナ禍においても 働き方改革と人材育成の努力を

安全で良質な医療を提供するために、医療の現場においても働き方改革は急務であると言われており、特に医師については時間外労働が年960時間以上の医師が一定数存在する事が社会問題となっています。2024年の改正労働基準法の施行を見据え、本学においても、医師の働き方改革について以下の様な取り組みを行っています。

- ①**正確な統計資料**:各医師の業務時間に関してより精度の高い方法で業務時間を把握するため、学内12カ所に出退勤把握のためのカードセンサーを増設し、勤務状況の客観的な把握に努めるとともに、地域の医療機関などで行う兼業の労働時間についても調査を進めています。
- ②**研修・e-learning**:管理職のみならず、医師一人一人が労働に対する正しい知識と意識改革を行うために、労働法制に関する研修を実施し、100%の参加を達成しています。
- ③**タスクシフト**:医師一人当たりの労働時間を減らすために、特定看護師(看護師特定行為研修を修了した看護師)の育成を2015年より国立大学として初めて開始しました。特定行為看護師の実装に向けて、タスクシフトのニーズが高い手術室と集中治療室などに集中的に配置し、医師の労働時間短縮を進めていく計画です。

人材育成や働き方改革は一朝一夕にはいかない難しい課題ですが、滋賀医科大学の理念や使命を達成するために不可欠であり、コロナ禍ではありますが、着実に進めていく方針です。



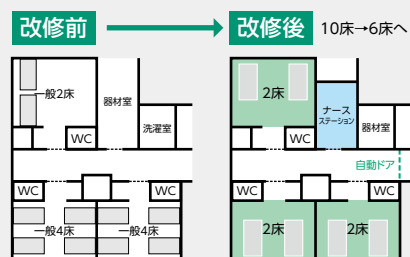
コロナ禍においても 医療の高度化の努力を

Stroke Care Unit (SCU) と精神科病棟の改編

コロナ禍で大変な状況ではありますが、滋賀医科大学は医療の高度化とビジョンの実現に向け着々と進んでいます。

脳卒中患者に対する急性期治療の進歩により脳卒中患者さんの予後は大きく改善するようになりました。本学では最先端の医療を効果的に提供できる体制を作るため、高度急性期に対応できる一次脳卒中センターとして**SCU(脳卒中集中治療室)**6床の運用を開始しました。今後、機能強化棟の新設によりベッド数の拡大とICUとの連動により包括的脳卒中センターの運用を計画しています。

精神科病棟では身体疾患との合併症例の増加や、社会のニーズに対応するため**個室化**を進めています。滋賀県全体における滋賀医科大学の役割を滋賀県や近畿厚生局と協議しながら、患者さんの安全と治療効果の拡大を目指しています。



〈SCU運用のための改修〉

働き方改革は医師の数を増やすこと？

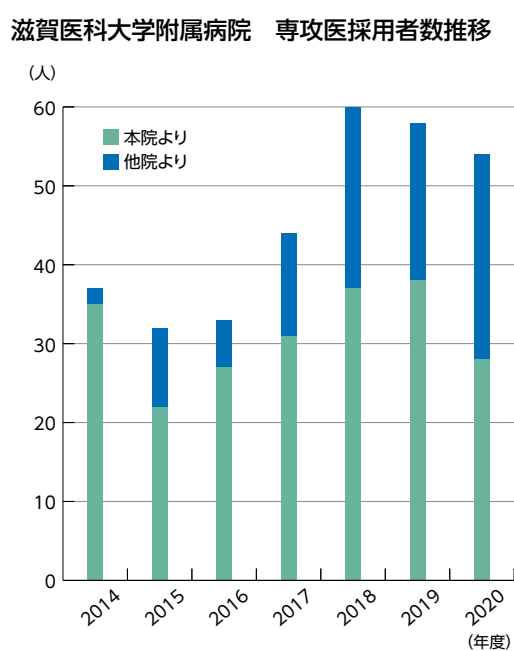
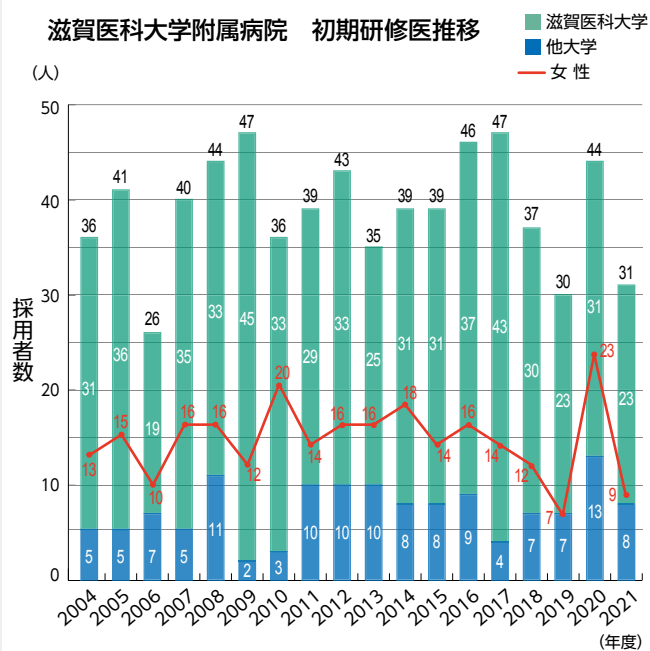
滋賀医科大学が滋賀県で活躍する医師を持続的に輩出するためには、いかに優秀な人材を数多く確保できるかが鍵となります。そのためには卒業生・出身大学を問わず、多くの有能な研修医に初期研修をしてもらう事、そして他府県で初期研修を修了した人を含めて、滋賀県の専門研修プログラムを選択いただく事が重要だと考えています。本学医学部附属病院における研修医の推移をみると、年度によりばらつきはありますが、平均すると毎年30~40名台前半の人数が本学で初期研修を行っています。本学卒業生だけでなく、他大学卒業生の占める割合も近年約20%以上となっており、女性研修医の数も増えています。本学の専門研修プログラムに登録した専攻医(後期研修医)数もここ数年毎年60名ほどの人数で推移し増加傾向にあります。特に本院以外で初期研修を修了した研修医が増加しているのは、良い傾向だと思います。今後持続的発展のためにも魅力あるプログラムにより活性化していく必要があります。

さらに今後取り組むべき重要な課題として、まず滋賀県内の主要研修病院との連携強化が挙げられます。本学の地域医療教育研究拠点である東近江総合医療センター、JCHO滋賀病院、公立甲賀病院との連携を強化し、さらに滋賀県など自治体とも協力して、県内主要研修病

院との研修ネットワークの確立に努める必要があります。もう一つ重要な課題として、医師の働き方改革が挙げられます。医師の過重労働が社会的な問題として取り上げられる中、多様な働き方や相互に支えあえる仕組みを充実させる必要があります。本院には育児をしながら研修している女性研修医や、共働きのため育休を取得する男性研修医もいます。そして各診療科の協力で、業務内容の見直しやセミナー開始時間の繰り上げ等、研修内容の質を担保しつつ労働時間の短縮に努めています。しかしながらこれらの課題の根本的解決には、はじめに申し上げた優秀な人材を確保することが大前提となりますので、引き続き皆様のご協力を得てこの永遠ともいえるテーマに取り組んでまいります。



医師臨床教育センター
川崎 拓 センター長



活躍する心臓血管外科

滋賀医科大学では、各診療科より高度な医療を提供しています。
その中でも特に活躍している心臓血管外科を紹介いたします。

我々、心臓血管外科が大切にしていることを述べたいと思います。

● 医師の存在意義は、何をさておき“県民のため国民のため”に尽きます。我々が滋賀医科大学心臓血管外科の一員として行動するときはずべてこの理念に基づいております。心臓血管外科診療を通じて社会に貢献すべく尽力する気持ちを忘れないようにスタッフ一同、意を一つにしております。心臓外科診療が患者さんの利益を最大限生み出すことができるように鍛錬していきたいと思っております。

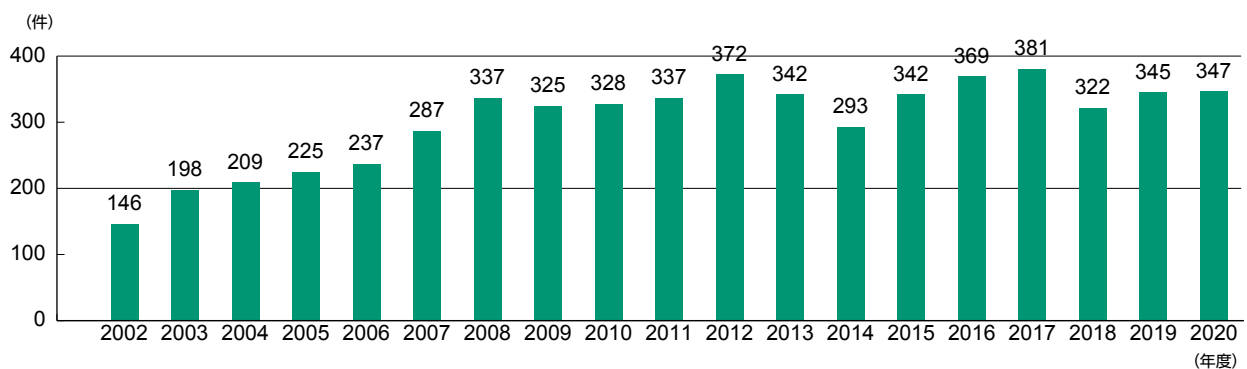
● 滋賀医科大学心臓血管外科は人材育成に力を入れます。永続的に安定した医療を地域に提供するには優れた人材を育成し続けることが必要です。手術スキルだけでなく、人として誠実に優しくふるまえるような人材を育成します。

● 滋賀医科大学心臓血管外科は仲間を大切にします。スタッフには、その家族も含めて幸せになってもらいたいと思っております。滋賀医科大学心臓血管外科に所属して心から良かったなと思えるような診療科を目指しております。そのために必要な第一のことは、関わってくださるすべての人に感謝の気持ちを忘れないことだと、スタッフ一同共通して認識しております。



心臓血管外科
教授 鈴木 友彰

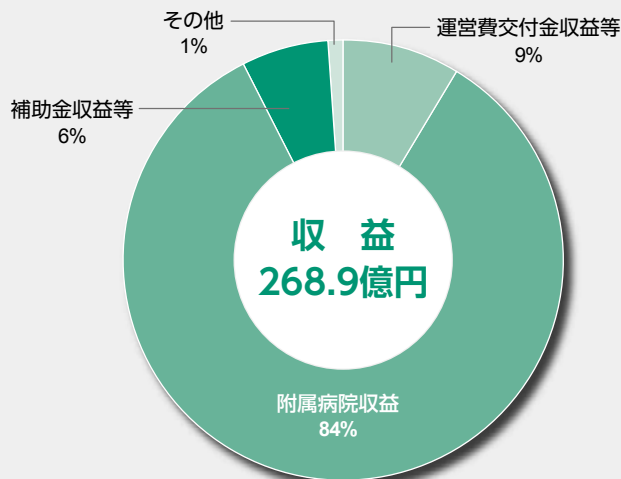
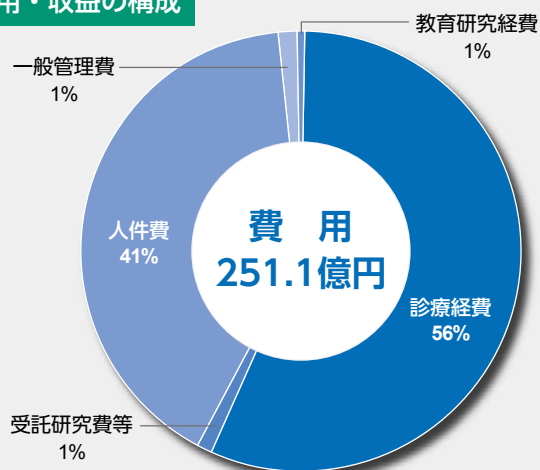
心臓胸部大血管手術 症例数



附属病院 財務情報(2020年度)

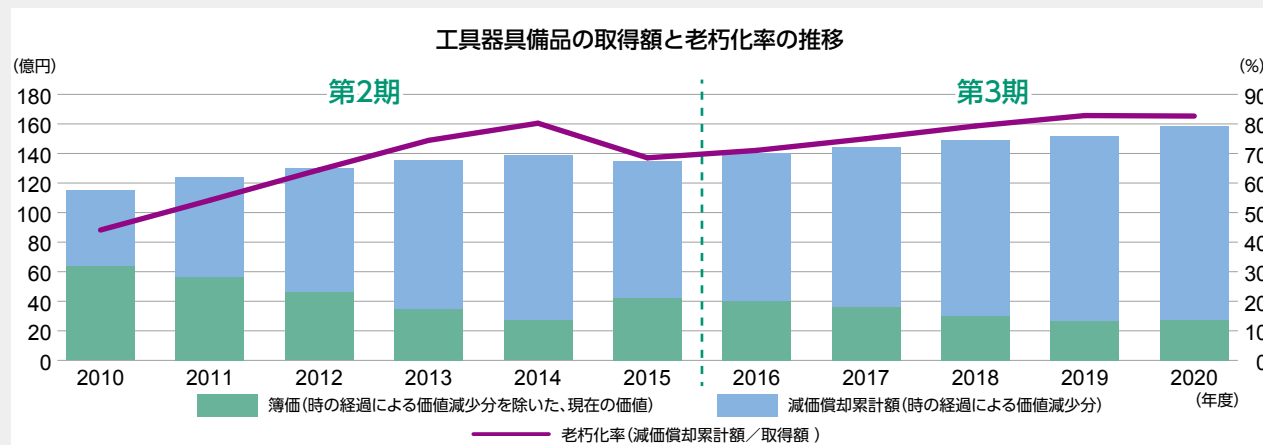
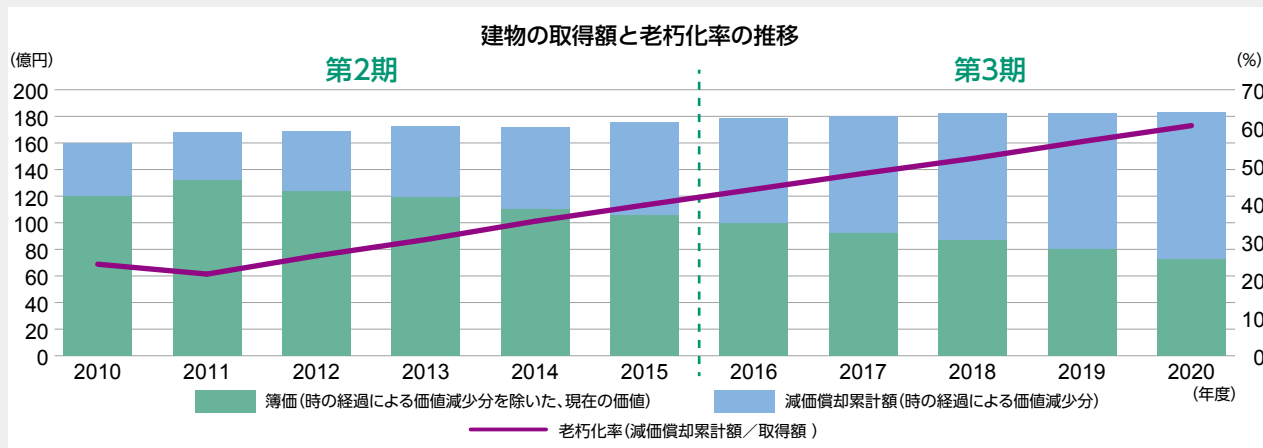
滋賀医科大学附属病院の財務情報を紹介します。

費用・収益の構成

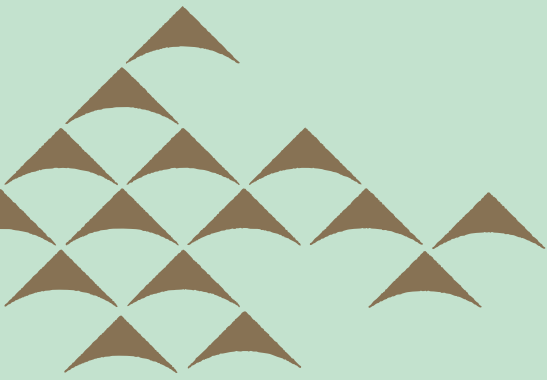


- 2020年度は新型コロナウイルス感染症診療と通常診療を両立させながら、病床稼働の回復と維持、関連医療機関との連携による新規入院患者数の回復、診療経費の節減といった経営改善の強化を行い、新型コロナウイルス感染症との戦いの中で、経営を維持することができました。その結果、病院の業務損益は17.8億円のプラスとなりました。

資産の現状



- 建物をはじめとした資産の老朽化が進んでいます。継続的に安心・安全な医療を提供するためにハード(建物と設備)の整備を行いサステナビリティを高めていきます。



Ⅲ.滋賀医科大学のミッション 4.地域医療

医学・看護学は社会のために

| Missions: Community Healthcare |





滋賀県の地域医療を支え続ける主役として、 総合力を備えた医療人の育成

辻川 知之 理事(地域医療担当)

滋賀医科大学は地域に支えられ地域に貢献するという理念の下、滋賀県内で従事する医療人の多くを育成する使命があります。滋賀県内の医師数は年々増加していますが、医師数の偏在による地域格差や診療科間の過不足はまだまだ解消されていません。地域の医療ニーズに応えるために今後必要なことは、地域にも様々な分野の専門医を集めることではなく、オールラウンダーである総合診療医や専門分野以外でも幅広く対応できる総合力を兼ね備えた専門医を多く育成することです。このため、医学生は大学病院で高度な最先端の医療を学ぶと同時に、地域中核病院や診療所においてcommon disease*を数多く経験しなければなりません。滋賀医科大学は、県下の病院としてNHO東近江総合医療センター、JCHO滋賀病院、公立甲賀病院と地域医療教育研究拠点の提携を結んでいます。これら地域中核病院では臨床実習学生、初期研修医、専攻医などそれぞれのレベルに応じた研修を滋賀医科大

学と連携して実践するだけでなく、研修終了後も個人の専門分野を生かしながら滋賀県で働き続ける医師を輩出する役割を果たしています。また、総合診療医は滋賀医科大学家庭医療学講座が行うプログラムだけでなく、県下の家庭医療／総合診療育成プログラムとも提携し、診療所や地域総合病院での研修を介していわゆる「かかりつけ医」の育成にも力を入れています。

さらに、コロナ過で浮き彫りとなった地域における看護スタッフ不足に対しても滋賀医科大学が果たす役割は重要です。近年は滋賀県内の看護師リーダーを育成すべく、特定行為領域のコースに力を入れています。コーストレーニングを経ることで、大学病院や地域中核病院において高度な看護技術で医師をサポートする人材だけでなく、訪問看護などにより地域に密着した現場でも活躍できるよう、必要な特定行為に係る看護師を多く育てることも新たな目標としています。

*日常的に高頻度に遭遇する疾患(風邪、腹痛など)

地域社会への貢献

滋賀県独特の地域医療事情

—滋賀県の地域医療教育研究拠点と滋賀医科大学—

滋賀県は琵琶湖を取り囲む鉄道と高速道路により交通網が発達した地域です。京都・大阪といった大都市へのアクセスが良く、都市近郊型の地域医療が求められる一方で、交通の不便な地域も存在する事から遠隔地型の地域医療も求められます。

医師数は、2004年以降着実に増加しているものの、人口10万人あたりで見ると全国平均を下回り、全国32位となっています。地域別では、大津保健医療圏以外では全国平均を下回っています。診療科における地域偏在も存在しています。医師の平均年齢は年々上昇しており、特に診療所の医師は男性が61.3歳、女性が55.1歳と医師の高齢化が見られます。(令和2年滋賀県医師確保計画)

看護師については、今後の地域で支える医療への転換に備え、在宅医療福祉を担う看護職員の確保が重要です。また、医療の高度化と多様化に対応する能力を有する看護人材を育成する必要があります。

滋賀県特有の地域医療事情に応えるため、滋賀医科大学は3つの地域医療教育拠点と共に、人材育成を行っています。

本県の医師偏在指標と区分

保健医療圏等名	医師偏在指標	全国順位(※)
滋賀県	244.8	16位
大津	378.3	7位
湖南	238.2	68位
甲賀	161.9	223位
東近江	200.3	104位
湖東	169.5	196位
湖北	193.2	121位
湖西	179.8	160位

(出典：滋賀県医師確保計画 令和2年3月 滋賀県)

※医師偏在指標の算出には、「医師・歯科医師・薬剤師統計」の平成28年末の医療機関従事医師数が用いられます。

※県は47都道府県中の順位(1~16位が多数都道府県。32~47位が少数都道府県)

※二次医療圏は335二次医療圏中の順位(1~108位が多数区域。224~335位が少数区域)

独立行政法人国立病院機構 東近江総合医療センター

当院は公的病院では初めて滋賀医科大学卒の医師が院長に就任した国立病院で、2013年には「滋賀県地域医療再生計画」により、結核病棟16床を含む320床の東近江総合医療センターとして再出発しました。同時に滋賀医科大学最初の地域医療教育研究拠点として、学生・研修医の人材育成や、大学との診療提携の確立を行う源流となり、これらは、かつて当院の副院長であった2名がJCHO 滋賀病院・公立甲賀病院の現院長に就任したことで、滋賀の地域医療全般に受け継がれています。

院長 井上 修平



卒後、東近江総合医療センターへ就職し、循環器内科・呼吸器外科病棟で勤務し、7年目になります。教育委員として、後輩に携わる立場になりましたが、一緒に学ぶ事や成長していく姿にやりがいを感じています。



滋賀医科大学
医学部・看護学科出身
看護師 山田 真実



独立行政法人地域医療機能推進機構 滋賀病院

当院は滋賀医科大学の関連施設の中では比較的都市部に近い病院です。滋賀病院(325床)・健康管理センター(健診数35,000件/年)・介護老人保健施設(100床)をもつJCHOグループの医療施設です。近隣に急性期病院がある中で、地域に貢献できる医療機関となるために、地域密着型の医療を提供できるように心がけています。多くの医師は滋賀医科大学出身で、学外教育機関として学生・研修医の実習・研修を担当しています。

院長・施設長 来見 良誠



滋賀病院に勤務し9年になります。育児と仕事の両立は大変なこともあります。患者さんが元気に退院される姿をみるととてもやりがいを感じています。

中堅看護師としての役割が果たせるよう、自己のスキルアップを目指し頑張っていきたいと思っています。



滋賀医科大学
医学部・看護学科出身
看護師 清水 真央

地方独立行政法人 公立甲賀病院

当院は急性期病棟だけでなく、回復期リハビリ病棟、包括ケア病棟、緩和ケア病棟を有するケアミックス型病院です。さらに、訪問診療や訪問リハビリテーションなど在宅医療にも力を入れており、今後も地域で多様化が予想される様々なステージの患者さんに対応することができます。この特性を生かし、医師や看護師が地域医療を実践するのに必要な医療・看護技術を学べる拠点として、これからも滋賀医科大学との人材交流を深めていきます。

理事長 兼 院長 辻川 知之



地域住民から信頼され、愛される病院を目指して、地域を支える看護に特化した人材育成を行っております。今後は滋賀医科大学医学部附属病院の看護部と提携して看護の質の向上に努めていきたいと考えています。

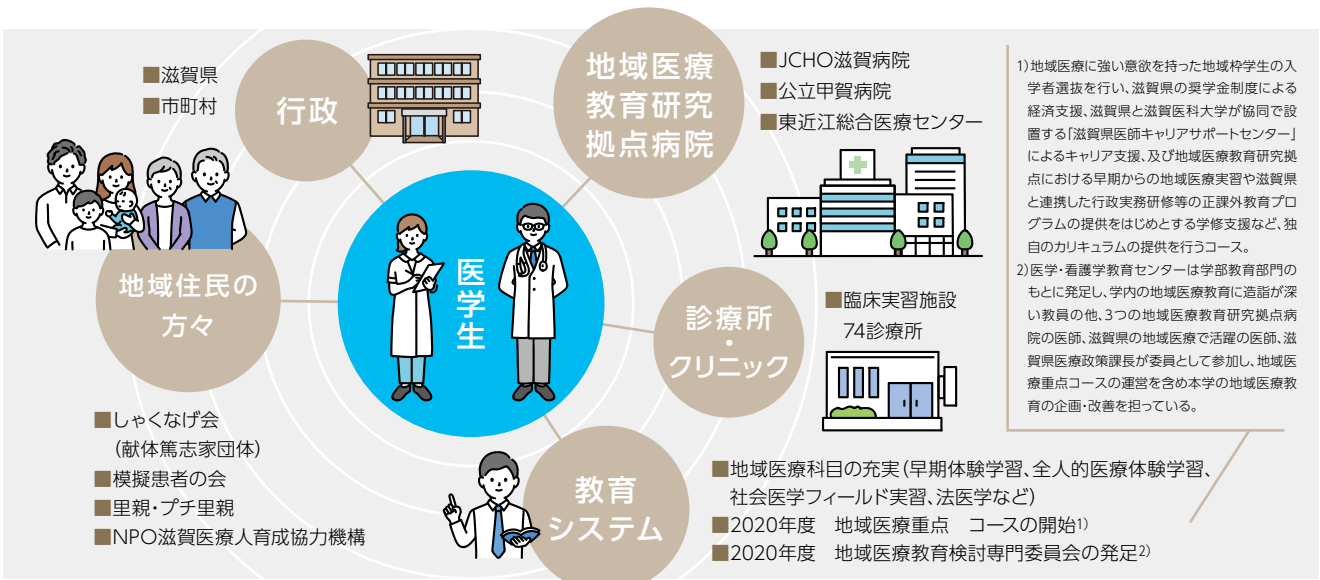


滋賀医科大学大学院出身
看護部長・院長補佐
川根 伸夫

地域医療教育：医学科

滋賀医科大学の地域医療教育について

滋賀医科大学は、「一県一医大構想」に基づき1974年に設置されて以来、「地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与する」という理念のもと「滋賀県の医療人育成」と「滋賀県の地域医療の発展」による社会貢献をミッションとして地域医療教育に取り組んできました。医学科のカリキュラムには、「早期体験学習」や「全人的医療体験学習」などの県内の医療機関・福祉施設と連携しているもの、「社会医学フィールド実習」や「法医学」など行政機関と連携しているものなどが多く配置されており、地域との関わりの中で地域医療を学ぶ体制を整備しています。さらに、2020年度より地域医療重点コースの開設と地域医療教育検討専門委員会を発足させ、より地域医療に重点を置いた教育システム構築を行っています。



地域医療教育には地域の方々の協力が必要不可欠

本学の地域医療教育は、多くの地域の方々のご協力の下に成り立っています。滋賀県には、地域医療教育に熱心で、家庭医(総合診療医)としてご活躍中の先生方が多数おられます。その先生方にお話し、今年度は「学内で地域医療の体験ができる!連続課外セミナー」を5回企画していただきました。これまでに終了した回はどれも活発な質疑応答が行われる学生参加型の講義であり、学生の大変よい学びになっていると感じています。また、地域の診療所・福祉施設の皆様や里親・プチ里親*・NPO滋賀医療人育成協力機構の皆様、献体篤志家団体である「しゃくなげ会」会員の皆様、学生の医療面接技能向上にご協力いただいている「模擬患者の会」会員の皆様を始めとして、多くの地域住民の皆様にも、本学の教育活動に関して多大なるご支援をいただいております。今後も滋賀医科大学は、良き医療人を輩出し続けるように努めてまいりますので、皆様からのより一層のお力添えを賜りますようよろしくお願いいたします。



医学・看護学教育センター
 教授 向所 賢一

*里親：滋賀県内で働くことに興味を持っている学生の様々な相談にのる県下で活躍する卒業生等
 プチ里親：地域の生活や環境・歴史などを学生に紹介するといった役割を担っている滋賀県下の一般住民の方々

地域医療教育：看護学科

訪問看護学領域が誕生しました！

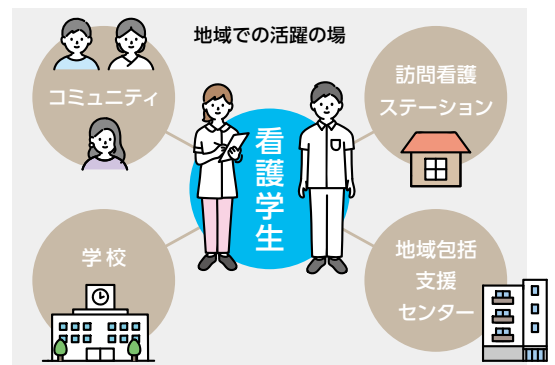
2021年3月、本学看護学科の公衆衛生看護学講座内に、訪問看護学領域を開設いたしました。訪問看護の実践経験を有する教員2名（1名は在宅看護専門看護師）が、学部在宅看護学関連科目、地域医療実践力育成コース（選択制）を中心に担当しています。地域医療実践力育成コースでは、実践的な訪問看護スキルの演習、入退院支援や訪問看護ステーションの管理を含む実習、先駆的な地域医療実践を行っている講師による講義受講などが含まれています。学生の地域医療を視野に入れたキャリア形成を支援します。

日本の訪問看護を発信するとともに海外の訪問看護教育機関と交流し、地域で活躍する看護職（訪問看護師、地域包括支援センターの看護師・保健師、学校看護師、コミュニティナース等）の教育・研究・実践の拠点形成を目指しています。

訪問看護や地域医療に関心をもつ中高生、訪問看護・在宅ケアに関する研究・管理・特定行為等について学びたい方々に選ばれる大学となるよう、尽力してまいります。



公衆衛生看護学講座 訪問看護学領域
教授 辻村 真由子



滋賀医科大学が地域に果たす役割と期待

滋賀医科大学は滋賀県内唯一の医学部・医育機関であり、毎年100名前後の医師を輩出していただいています。これまで特定の疾患や臓器に特化した専門医を養成し、今では滋賀県の地域医療になくてはならない存在となつていただいています。

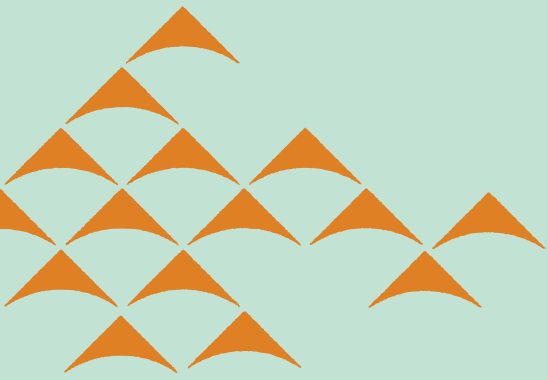
それでは、これからの滋賀県、地域で期待されている医師像とはどのようなものでしょうか？ 地域住民（医師以外の医療職の方も）の身近で相談できる医師の養成が期待されていると私は感じています。

医学生のうちから医師は、①外来診療、②在宅医療、在宅での看取り、③学校医、④乳幼児検診・予防接種、⑤産業医など、地域医療に必要な業務について実践的な研修を受けているものと地域住民は思っています。そして地域に赴任した医師には当然そのような仕事をいただけるものと期待しています。

コロナ禍になり、自分の地域の医療を守る気概のある医療者が地域では望まれています。地域に目が向いている医師、身近に相談できる信頼のおける医師（総合診療専門医）の養成にもご尽力いただき、次の世代につながる滋賀県の地域医療に貢献していただきたいと心から願っています。



医療法人社団 弓削メディカルクリニック 院長
滋賀家庭医療学センター センター長
雨森 正記



Ⅲ.滋賀医科大学のミッション

5.男女共同参画

キャリアをサポートするために

| Missions: Gender Equality |





男女共同参画推進室開設から10年

—上手に頼ってもらえるサポートシステムの提供を目指して—

尾松 万里子 学長補佐(男女共同参画担当) 男女共同参画推進室長

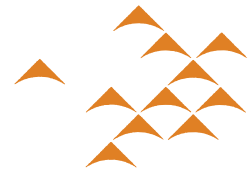
滋賀医科大学では、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学となることを理念としています。この理念のもと、男女共同参画推進室は、さまざまな取組を行ってきています。

他に類を見ない本学独自の取組である「スキルズアッププログラム」は、長期に医療現場を離れていた女性医師を週6時間以内という超短時間勤務で雇用し、復帰研修を行う制度です。また、育児・介護等のライフイベントに直面した女性医師が、キャリアを継続するために利用できるなど、柔軟な対応を行っています。個々の事情に応じたサブプログラムを提供しており、利用者の多くは終了後に県内病院で地域医療において活躍されています。

また、「研究者のための支援員配置」は、育児や介護等のライフイベントにより十分な研究時間を確保できない本学の男女研究者に、本学の学部学生を研究支援員として雇用し配置する制度です。この制度により、研究者は家族と過ごす時間を増やししながら研究を進めることが可能になりました。支援員となった学生の中には、学会発表や論文の共著者となる研究成果を挙げる者も出てきています。

今後、ますます個人のライフスタイルは多様化すると思われれます。学内外のニーズを調査し、上手に頼ってもらえるサポートシステムを提供することにより、社会に貢献していきたいと考えています。

男女共同参画推進室10年のあゆみ



2007年 2月	保育所「あゆっこ」を大学敷地内に開所
2009年 9月	男女共同参画推進基本計画(マスタープラン)策定
2011年 7月	男女共同参画推進室設置
	滋賀県「女性研究者等支援事業」を受託
2012年 8月	文部科学省科学技術人材育成費補助事業(JST)「女性研究者研究活動支援事業」採択
2012年 9月	「女性研究者支援担当学長補佐」配置 (2016年度より「男女共同参画担当学長補佐」)
2012年12月	病院内に搾乳室を設置
2013年 1月	病児保育室の開所
2013年 7月	「滋賀医科大学女性研究者賞」創設
2013年 9月	「女性研究者のための支援員配置」開始
2014年 7月	研究支援員を登録する「三方よし人材バンク」設立
2015年 3月	厚生労働省次世代育成支援認定「くるみんマーク」を取得
2015年 4月	夜間保育の開始
2016年 4月	「女性研究者のための支援員配置」を「研究者のための支援員配置」に変更し、男女研究者の支援を開始
2016年11月	滋賀医科大学医学部附属病院 「女性医師支援のためのスキルズアッププログラム」 設立
2017年 6月	内閣府2017年度「女性のチャレンジ賞特別部門賞」受賞
2020年 4月	「女性医師支援のためのスキルズアップ・プレプログラム」開始
2021年 4月	「女性医師支援のためのスキルズアッププログラム ～アドバンスコース～」開始

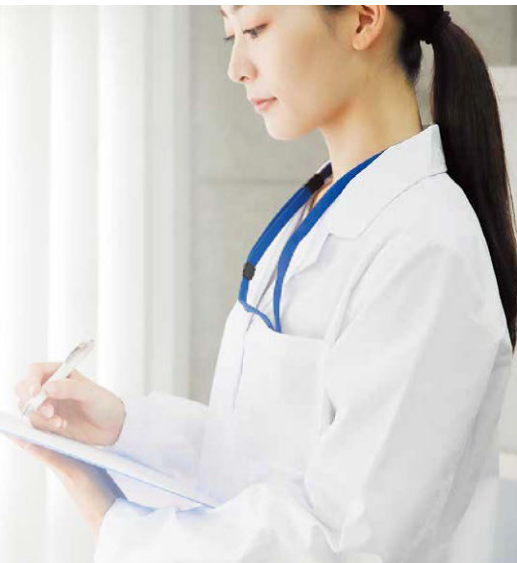


育児支援やその他の取組についての詳細はウェブサイトをご覧ください。
滋賀医科大学男女共同参画推進室 URL : <https://danjokd.shiga-med.ac.jp/>

スキルズアッププログラム

女性医師の復帰支援として、長期に医療現場を離れていた場合の研修や、ライフイベントに直面した場合のキャリア継続のため、希望者を附属病院の診療登録医として、週6時間以内という短時間勤務で雇用する「スキルズアッププログラム」を行っています。

また、診療科を決めかねている場合に最大3つの診療科をローテーションできる「プレプログラム」制度も利用できます。2021年度からは、勤務時間の上限を週6時間から週12時間に拡大したアドバンスコースも導入しています。修了者は、本学や県内の病院に勤務しており、地域医療への貢献が期待されています。



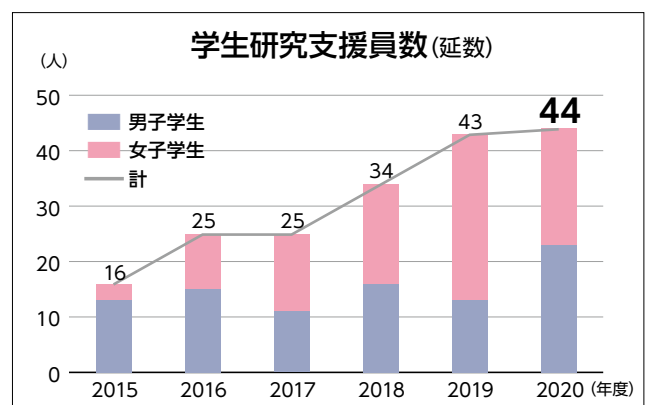
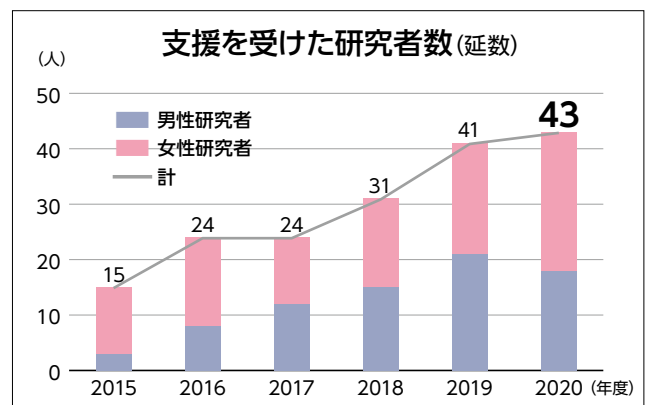
研究者のための支援員配置

研究者支援として、育児・介護などのために十分な研究時間を確保できない「男女」研究者に、本学の学部学生を研究支援員として雇用する「研究者のための支援員配置」を実施しています。現在までに、延べ213名の研究者が利用し、延べ236名の支援員を配置しました。

制度を利用した研究者

滋賀医大に着任後子供を授かり、産後2ヶ月からフルタイムで職場復帰しました。時間的制約がある中、効率よく質の高い研究を行えるのは支援員制度・支援員の皆様のお陰です。この場をお借りして感謝申し上げます。

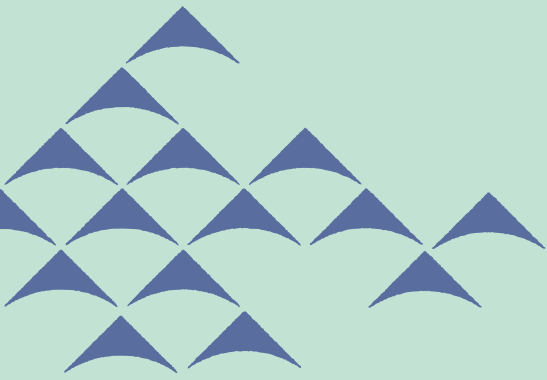
左：准教授 大野 美紀子



支援員としてサポートした学生

研究支援員の仕事は様々な実験手法を教えていただけなので、とても面白く、普段の授業とはまた違った知識が得られて勉強になります。授業の空き時間に働けたり、学業に支障が出ないように考慮していただける点も非常に助かっています。

右：医学科第4学年 小宮 かさね



Ⅲ. 滋賀医科大学のミッション 6. 国際交流

滋賀と世界をつなぎ
地球の未来に貢献する！

| Missions: International Exchanges |



滋賀と世界をつなぐ国際交流



国際交流協定締結大学等

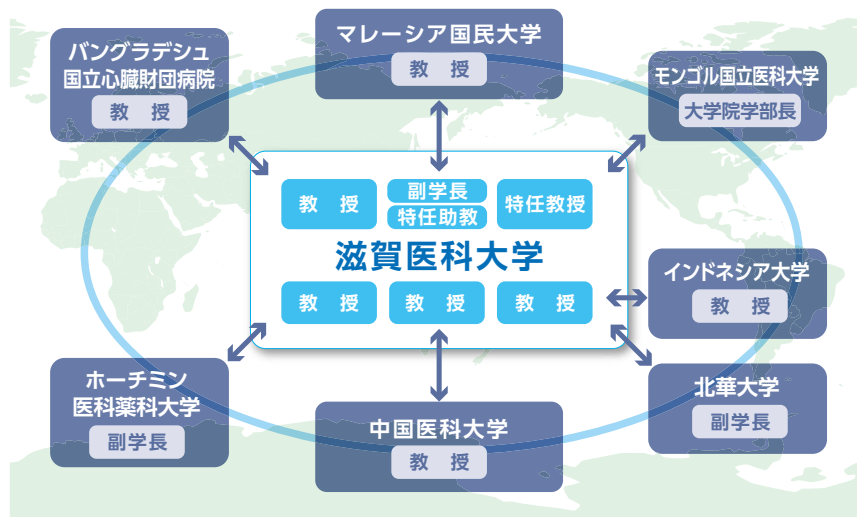
国際交流協定を締結する海外機関(大学・病院・研究所等)から本学大学院に留学し、学位を取得後、母国で教鞭をとる人材も多く、その一部は、本学のパートナー教員として交流事業に携わっています。

国際交流協定締結大学等(13カ国)



25 機関

パートナー教員設置状況



(2020年5月1日現在)

学生・教職員の海外派遣

学生の海外派遣では、医学科第3学年または第4学年※の海外自主研修、第6学年の学外臨床実習、看護学科第4学年の短期留学等を支援しています。教員の海外派遣では、准教授以上を対象とした海外研究制度(1ヶ月以内)や、若手教員を対象にした海外研修制度(12ヶ月以内)、医療職員等を対象とした海外研修制度(12ヶ月以内)などを設け、国際的な人材の育成を図っています。

※配当年次は入学年度で異なります

留学生・海外研究者の受入れ

主にアジア各国から優秀な留学生を受け入れています。疫学リーダーコースでは、原則として全授業を英語で行っています。私費留学生を支援するためのSUMSグラント(留学生給付奨学金制度)を設け、また、留学生の就職支援を目的とする日本語教室を開講しています(詳細p.56)。2016年度には、神経難病研究センターに国際共同研究部門を設置し、海外から優秀な研究者を教授として迎え、若手教員、大学院生、学部生とともに国際共同研究を実施しています。

学生の海外派遣(卒業までに全学生の26%が留学)



93 名
(2019年度)

留学生数(8カ国)



36 名
(2020年5月1日現在)

教職員の海外派遣(全職員の15.3%)



212 名
(2019年度)

国際交流会館の定員



45 名
(2021年10月1日現在)

※新型コロナウイルスによる影響のため2019年度実績を交えて掲載しています。

サポート体制の充実

SUMS-TAS : SUMS Total Advanced Support for Foreign Students

入学から卒業後まで一貫した留学生支援

学生課、IR室、国際交流センターが連携し、留学生ひとりひとりの個性に合わせ、入学前から卒業後まで一貫した支援を行います。

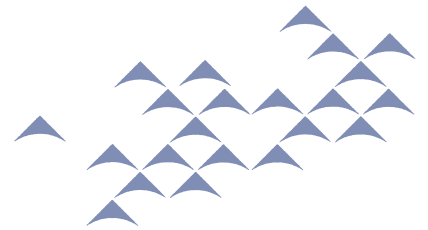
国際交流センター 新設

2020年4月1日、国際交流事業の拡充と一元化を目指し、国際交流センターが設置されました。



SUMSグラント (留学生給付奨学金制度) 創設

海外協定校との連携により、世界各国から優秀な人材を募り、本学大学院博士課程において先端的な教育研究に触れる機会を提供するため、留学生給付奨学金制度を2021年度に創設しました。



国費留学生優先配置 採択

文部科学省事業「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に基づき、2021年度より特別枠として4名／年の国費留学生を受け入れています。



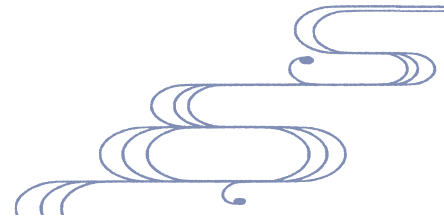
国際交流会館 増設

2021年10月、国際交流会館(分館)にシェアルーム2室を増設し、本館と合わせて入居定員45名となりました。本学では、入居を希望する単身留学生全員が同館に入居することができます。



日本語教室 拡充

2021年4月より、日本語教室サポーターを増員し、初級から上級まで5つのコースを新たに開講しました。2021年10月には、原則としてすべての留学生が日本語教室に参加することになり、中級以上の学生には、日本語能力試験に関する受験支援を行い、国内就職を見据えたプログラムを実施しています。



留学生の声

卒業生



Anarmaa Mendsaikhan

Special Contract Assistant Professor
Molecular Neuroscience Research Center
New affiliation: Post-Doctoral fellow
Department of Pharmacology &
Chemical Biology
Emory University

滋賀医大でのかけがえのない経験

It was a wonderful experience at SUMS

I am interested in deciphering the molecular and cellular mechanisms of Alzheimer's disease. It was a privilege to be given a chance to work on a project that I am passionate about as a Ph.D. student at SUMS. My main project was on two lysosomal, neuroprotective protein and their involvement in Alzheimer's disease pathologies in a series of human brain samples. Our team evidenced that these two proteins are associated with main pathological features of Alzheimer's disease.



Ebtehal Salman

NCD Epidemiology Research Center.
Current job: Clinical Development
Department, Technology Department HQ,
OMRON Healthcare Co., Ltd. Kyoto.

高血圧を捉える：私の情熱と人生のミッション

Hypertension awareness: Found passion and life-mission

For my Ph.D. thesis, I hypothesized high blood pressure and its indexes can help predict different types of non-symptomatic cerebrovascular diseases in generally healthy adult population depending on the years the blood pressure was measured preceding brain disease and type of cerebrovascular disease detected on MRI. Now, working at a medical company and continuing my interest on health issues related to high blood pressure, with my team, we are building strategies to increase the awareness of hypertension management remotely.

在学生



Andreas Michael Sihombing, MD

4th year Doctoral Program

機会の扉を開く

Doors of Opportunity

As a Ph.D. candidate at SUMS, I had many opportunities to improve my research skills. Besides learning medical statistics and epidemiology at the NCD Epidemiology Research Center, I also had an opportunity to study oncology abroad at Johns Hopkins University through the university program. Now, I seek to clarify the dynamics between cancer cells and the microenvironment that contribute to the development of peritoneal recurrence in resectable gastric cancer patients at the Department of Surgery. You just have to ask!



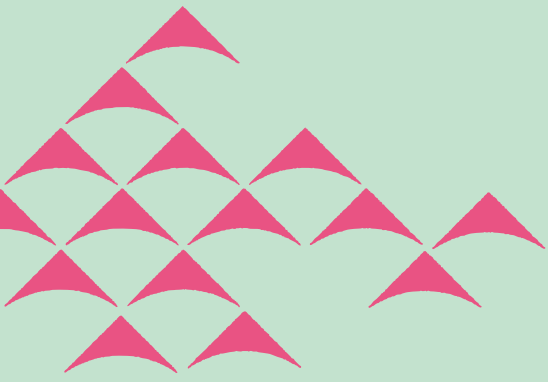
Mbugua Regina Wachuka

2nd year Doctoral Program

乳がんの新規予後バイオマーカー

Novel biomarkers for cancer

We aim to identify prognostic biomarkers and therapeutic targets for breast cancer. The targets' role is evaluated by genome wide expression analyses and tissue microarray analysis of various solid tumor tissues. We also elucidate the possible molecular mechanisms of action and signaling pathways regulated by these genes. We believe that this will lead to the development of novel treatments with high efficacy that can exert potent biological effects on cancer with minimal adverse effects and eventually reach clinical application.

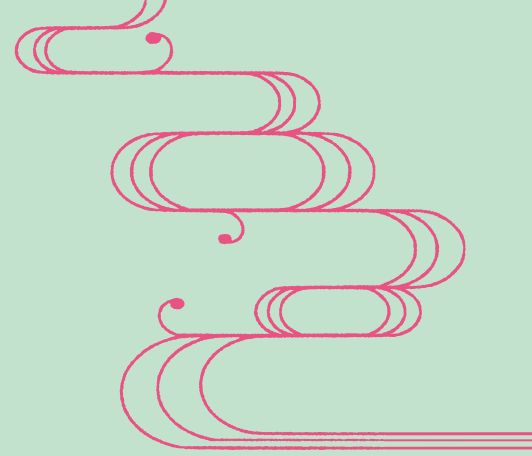


Ⅳ.ガバナンス

サステナブルでアトラクティブな 大学を支える組織体制

| Governance |





強靱なガバナンス体制のもとでの 戦略的な法人経営

中野 正昭 副学長・事務局長・内部統制システム統括管理責任者

国立大学法人のステークホルダーは、学生、保護者、卒業生や納税者である国民はもとより、産業界、地域社会、政府、国内外の関係機関など、多岐にわたっています。これらの多様な関係者の期待に応えて、大学が社会に貢献するために教育と研究の質の向上を図り、成長、発展し続けることができるよう、組織内部において適正な執行と監督の仕組みを構築するとともに、大学経営の状況や意思決

定の仕組みについて透明性を確保し、関係者への説明責任を果たすことが重要です。

特に、国立大学法人においては、高い公共性が求められ、各種の財政支援等が行われていることから、滋賀医科大学では強固なガバナンス体制を築き、透明性を確保するとともに戦略的な法人経営に努めてまいります。



目標・計画の策定・実行・検証体制

本学は、理念・使命(巻頭ページ)を踏まえ、文部科学大臣から提示された中期目標(第3期:2016年度~2021年度)を達成するため、中期計画を策定し、それに基づき、年度計画を策定・実行するとともに、学内の評価委員会で成果の検証を行い、次年度以降の計画や次期中期目標・計画に反映させています(p.12)。

策定・検証に当たっては、役員会、教育研究評議会、経営協議会、総合戦略会議、学外有識者会議をはじめ、学内外の多様な関係者の意見等を参考に法人経営を行っています。

教育・研究・診療の各領域において、PDCAサイクルを整備しています。教育活動においては、入学者選抜、入試広報、高大接続等に関する調査研究及び企画立案を行う「アドミッションセンター」、医師、看護師、保健師及び助産師の育成にかかる学生教育を実施する「医学・看護学教育センター」を設置しています。医学部附属病院には、医師臨床教育を実施する「医師臨床教育センター」や看護人材育成を担う「看護臨床教育センター」を設置しています。そして、「教育推進本部」がこれら全ての組織と連携して教育活動の戦略を立案し、入学から卒前・卒後まで一貫した教育を提供する体制を整

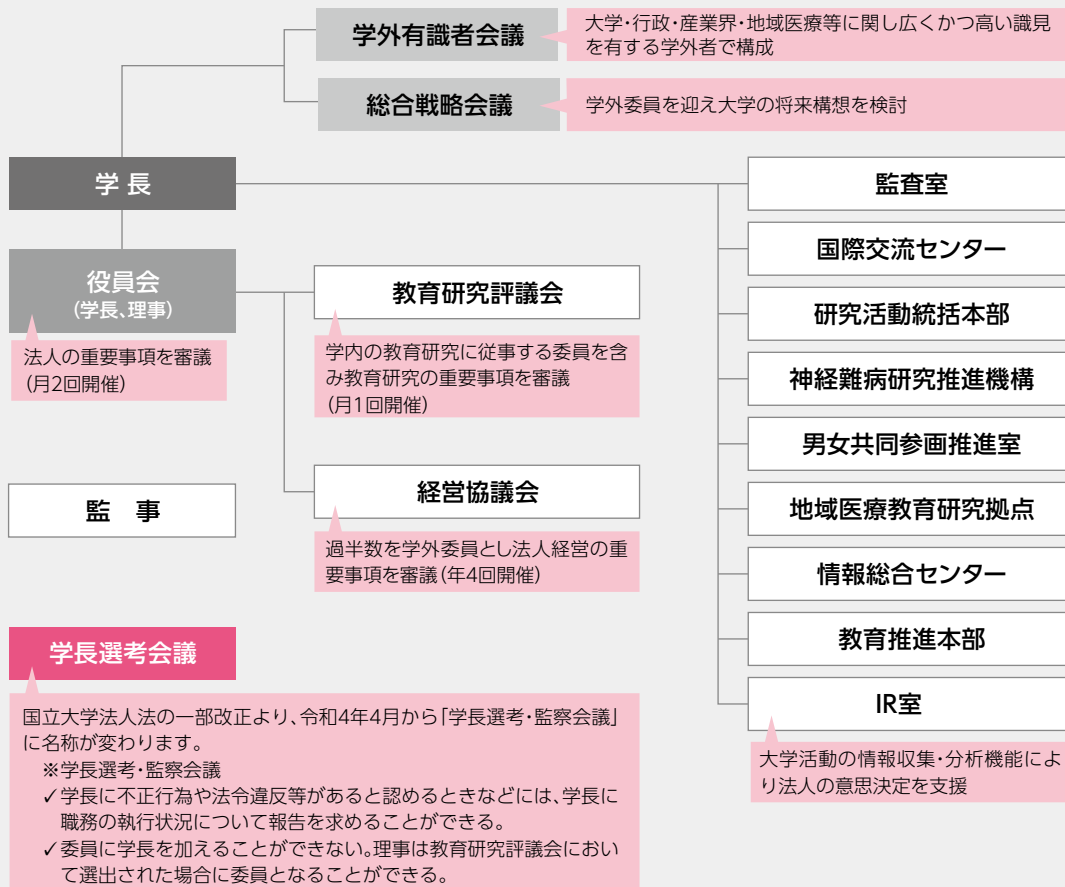
ています。

各センターの教育活動は、「教学活動評価委員会」で定期的に評価し、「教育推進本部」で改善に取り組んでいます。

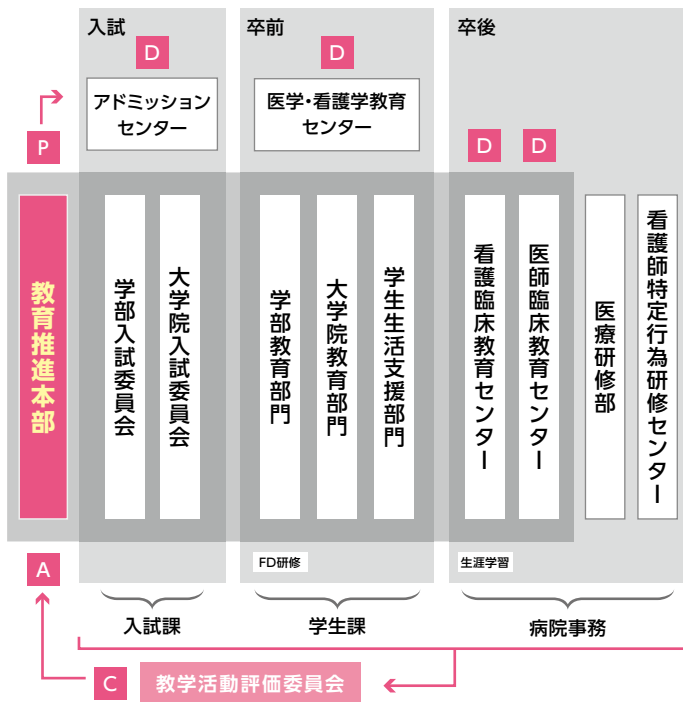
研究については、学術研究の支援、重点研究の推進、若手研究者の育成、産学官金連携の促進等を担う「研究戦略推進室」及びその重要事項を審議する「研究戦略推進委員会」を設置して研究を推進しています。また、「倫理審査委員会」及び「認定再生医療等委員会」を支援する「倫理審査室」、利益相反マネジメント、安全保障貿易管理、研究公正等を担う「医学研究監理室」を設置し、研究リスクマネジメントを行っています。これらの研究活動支援組織を「研究活動統括本部」が統括し、研究者の研究活動を支援し、本学における学術研究を推進しています。2020年度には新たに倫理委員会の枠外の研究を審査するため、医学科・看護学科倫理審査委員会を設置するなど、研究リスクマネジメント改革を進めています。

医学部附属病院においては、役員会の監督の下、病院の将来計画・経営方針・診療体制・評価改善等について審議する「病院管理運営会議」を中心とした経営体制を敷いています。

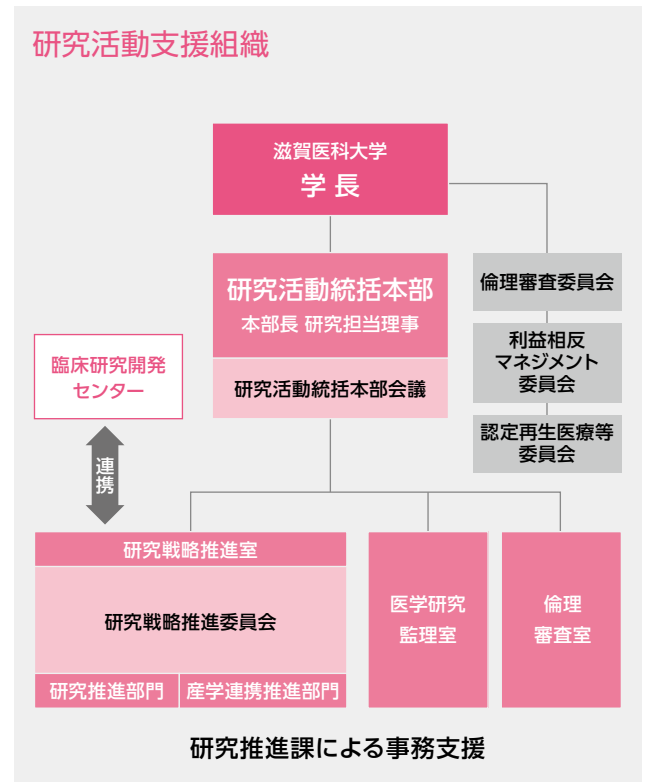
国立大学法人 滋賀医科大学 管理運営組織



教学PDCAサイクル



研究活動支援組織



学長のリーダーシップを支える体制

学長は、自らを補佐する人材として、「研究・企画・国際担当」、「医療・財務・労務担当」、「教育・学生支援・コンプライアンス担当」、「地域医療担当」（非常勤外部理事）の4名を理事に任命しています。加えて、「男女共同参画」、「大学改革」、「研究推進」、「臨床研究」、「国際交流」、「国際戦略」、「労務」、「基礎医学教育・地域医療教育改革」、「臨床教育改革」という特命事項を担当するため、学長補佐及び副理事を任命しています。このように、学内外から適任者を選任・配置し、自らをサポートする体制を整備しています。

本学は、役員として、法人の業務を監査する監事2名を置いています。また、国立大学法人法の一部改正（令和4年4月1日施行）にともない、今後、監事体制の強化を行う予定です。



監事 船橋 恵子



監事 山科 正三

職名	氏名	担当等
学長	上本 伸二	
理事/副学長	遠山 育夫	研究・企画・国際担当
理事/病院長/副学長	田中 俊宏	医療・財務・労務担当
理事/副学長	松浦 博	教育・学生支援・コンプライアンス担当
理事（学外）	辻川 知之	地域医療担当
副学長	中野 正昭	総務・内部統制等担当
監事（学外）	船橋 恵子	コンプライアンス・法律業務に精通
監事（学外）	山科 正三	組織業務・会計業務に精通
学長補佐	尾松 万里子	男女共同参画担当
学長補佐	森野 勝太郎	大学改革担当
副理事	等 誠司	研究推進担当
副理事	久津見 弘	臨床研究担当
副理事	加藤 穰	国際交流担当
副理事	縣 保年	国際戦略担当
副理事	北川 裕利	労務担当
副理事	向所 賢一	基礎医学教育・地域医療教育改革担当
副理事	伊藤 俊之	臨床教育改革担当

内部統制システム・マネジメント改革

内部統制

経営、教育研究および社会貢献活動の安定性と健全性を示すため、学長を「最高管理責任者」、事務局長を「統括管理責任者」とする内部統制システムを整備・実施し、コンプライアンス、リスクマネジメント及び確実な事業継続に取り組んでいます^{※1}。

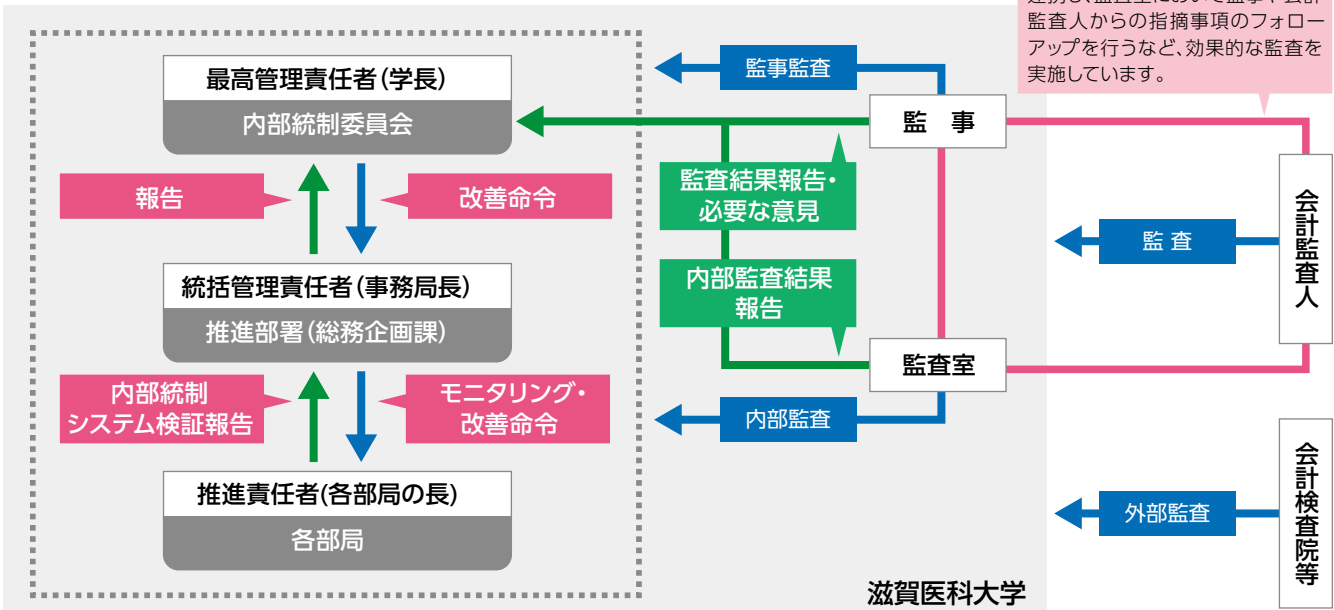
監事は、法人業務の適正かつ効率的な運営を図り、会計経理の適正を確保するため、事業年度ごとに監査計画書を作成し、監事監査を実施しています。また、役員会、教育研究評議会、経営協議会等の主要な会議に出席し、学長・理事の職務や法人業務の適正な遂行を確保する体制の整備・運用状況を確認しています。

※1 滋賀医科大学「法定公開情報(情報公開法)」
<https://www.shiga-med.ac.jp/introduction/information-disclosure/act-on-access-to-information>

内部監査については、法人の経営状況を適法性と妥当性の観点から公正かつ客観的な立場で調査・検証し、健全な経営につなげるため、「監査室」を設置し、内部監査を実施しています。年度当初に内部監査計画を作成し、業務監査として情報セキュリティや個人情報の適切な管理等、会計監査として公的研究費の執行状況等を掲げ、社会的にも問題となっている事案の未然防止に取り組んでいます。

また、国立大学法人法に基づき、文部科学大臣が選任した「会計監査人」による財務諸表、事業報告書及び決算報告書の監査を受け、すべての重要な点において適正に表示しているとの意見をいただいています。

滋賀医科大学 内部統制システム及び監査体制



学長選考

学長選考会議は、本学の理念を踏まえた学長選考基準を策定して公表し、広く学内外から学長となるに相応しい者を求めています。

学長の任期については、学長選考会議で適正な任期を審議し、中期目標期間の開始2年前から6年間(再任不可)と定めています。

学長の業務執行状況については、以前は就任から2年目及び4年目に学長選考会議において学長の業務執行状況を確認し、その結果を本学ホームページで公表していましたが、2020年度以降は毎年度実施しています。また、学長の解任手続にかかる必要事項も定めています。

国立大学法人ガバナンス・コード^{※2}

ガバナンス・コードは国立大学法人が自らの経営を律しつつ、その機能をさらなる高みへと進める活動の基本原則となる規範であり、「コンプライ・オア・エクスプレイン」(原則を実施しているか、実施していない場合には、その理由を説明するか)の考え方を基礎としています。各法人は、経営協議会や監事による、それぞれの特色を踏まえた適合状況の確認と厳しい目による指摘を通じ、自ら透明性及び信頼性の高いガバナンス体制を構築し、経営機能を高めることが求められています。

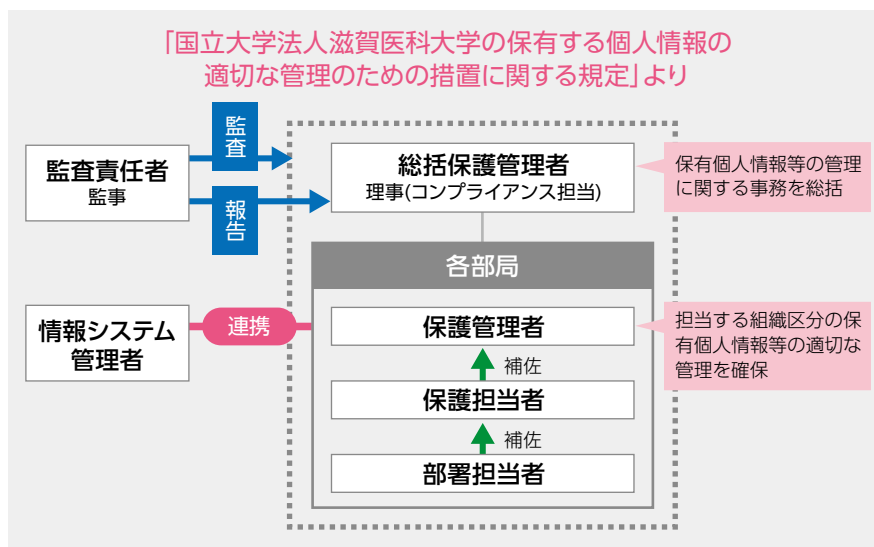
本学では、経営協議会や監事によるチェックを受けたガバナンス・コード適合状況を毎年度公表し、一層透明性を向上させ、社会の皆さまからの信頼と理解を得続けられるよう努めてまいります。

※2 国立大学協会「国立大学法人ガバナンス・コード」 URL: <https://www.janu.jp/univ/code/>

個人情報保護

本学では、「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」に基づき、「国立大学法人滋賀医科大学の保有する個人情報の適切な管理のための措置に関する規程」を定め、保有する個人情報の保護に努めています。

また、毎年度、個人情報保護に関する研修会を開催し、職員等に対して、保有個人情報等の取扱いについて理解を深め、個人情報の保護に関する意識の高揚を図るための啓発・教育研修を行っています。



人事給与マネジメント改革

教育研究力の向上に資する魅力ある人事給与制度の実現を図るため、文部科学省が取りまとめた「国立大学法人等人事給与マネジメント改革に関するガイドライン」を参考に、新年俸制度の導入、クロス・アポイントメント制度の実施、兼業規程の改訂など、各種取組を実施しています。

クロス・アポイントメント制度の実施

新たなイノベーション創出のためには、卓越した人材が大学や公的研究機関、企業等の枠を越えて、複数の組織において活躍できるような環境を整備することが必要とされており、本学では平成27年11月より、クロス・アポイントメント制度を導入しています。

クロス・アポイントメント制度とは、出向元機関と出向先機関の間で、出向に係る取決め（協定等）を締結し、当該取決めに基づき労働者が二つ以上の機関と労働契約を締結の上、双方の業務について各機関において求められる役割に応じた従事比率に基づき、研究・開発及び教育に従事することを可能にする制度です。

兼業規程の改訂

大学教員が、講演やコンサルティング業などをはじめとした短期兼業・長期兼業を行うにあたって、製薬企業等から受け取る謝金等を受領する在り方に関しては、利益相反を回避し、本務に支障が生じないよう、透明性を持って行う必要があります。

このことから、本学では、2021年4月に兼業規程を改訂し、従来からの「1週間あたりの延兼業従事時間数の上限＝原則8時間」という制限に加え、「営利企業（製薬会社等）からの依頼による兼業に従事して受領する謝金等の額は、本学から前年に支給している給与総額を超えない」という制限を追加しました。

不正アクセス検知システムの独自開発と活用

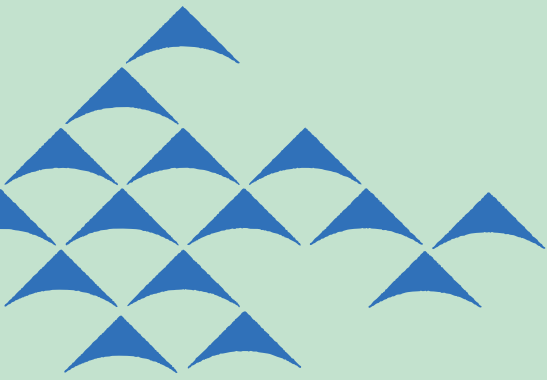
コロナ禍ではオンラインでの情報交換が増えるとともに、対策が必要な不正アクセス行為の認知件数も増加傾向にあります。

情報総合センターでは、学外から本学の個人アカウントに対して行われる不正アクセスを、自動検知するシステムを開発しました。これは、個人アカウントへのアクセスを試みるすべてのIPアドレス（ネットワーク上のコンピュータに割り振られた番地）から、不正アクセスの可能性が高いものを自動的に拾い上げて、リアルタイムでモニタリングし、利用者とセキュリティ担当者に通知するシステムです。そのIPアドレスを分析することにより、従来よりも精度の高い「不正アクセス検知」を実現しました。

本システムを導入後は、本学が標的型メール攻撃を受けた際にも、実害が出る前にID・パスワードを窃取された疑いのあるアカウントを迅速に検知できるようになり、システムが有効に機能していることを確認しています。



https://www.soumu.go.jp/main_content/000735800.pdf
総務省「不正アクセス行為の発生状況」より引用



V.財務情報

自立した経営を目指す

| Finance |



国立大学法人の会計の仕組み

国立大学法人の特徴

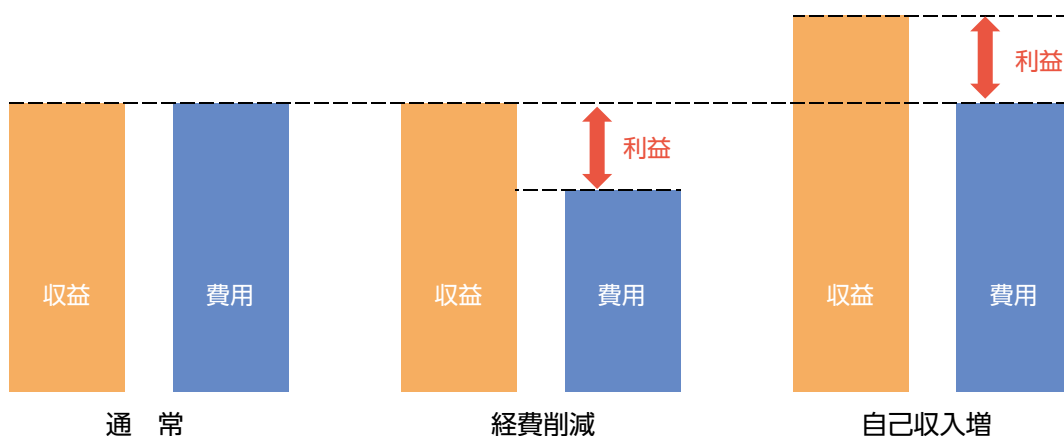
	国立大学法人	一般企業
主な業務の目的	公共的な教育・研究	利益の最大化
営利性	非営利	営 利

国立大学法人会計の特徴 損益均衡

国立大学法人は、利益の獲得を目的とせず、国からの運営費交付金や学生からの授業料を主な運営財源としています。そのため、通常の運営を行えば、収益と費用がプラスマイナスゼロとなり、利益が出ない会計の仕組みとなっています。

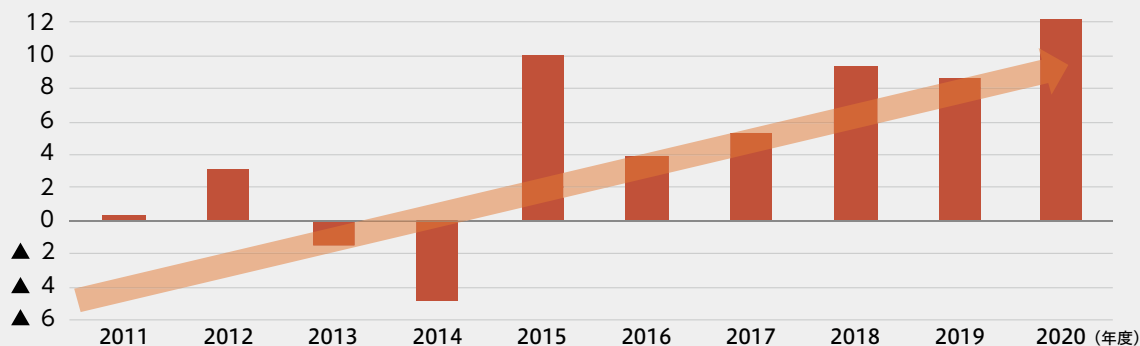
しかしながら、経費削減によって費用を抑えることがで

きたり、附属病院の経営等により自己収入を増加させることができた場合は、利益が生じるようになります。このような経営努力によって発生した利益については、文部科学大臣の承認を受けることで、翌年度以降の大学の運営費として活用できるようになります。



(億円)

当期総利益の推移



滋賀医科大学は、主に、自己収入である附属病院収益の増加を背景に、利益が増加しています。

財務情報と戦略

貸借対照表の概要

貸借対照表は、決算日(3月31日)における資産、負債、純資産を表し、大学の財政状況を明らかにするものです。

(億円)

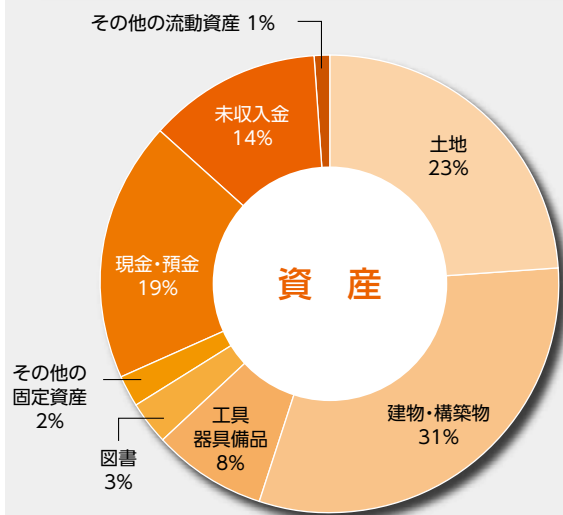
資産の部	2019年度	2020年度	対前年度 増減
固定資産	290.2	291.2	1.0
土地	101.6	101.6	0.0
建物・構築物	132.2	134.9	2.7
工具器具備品	33.8	34.8	1.0
図書	14.0	13.8	▲ 0.2
その他の固定資産	8.4	6.0	▲ 2.4
流動資産	134.3	150.0	15.7
現金・預金	78.7	83.1	4.4
未収入金	51.4	62.2	10.8
その他の流動資産	4.2	4.6	0.4
資産 計	424.5	441.3	16.8

建物・構築物(対前年度比 +2.7億円)

建物・構築物の増は校舎2棟の改修が完了したことによるものです。滋賀医科大学は校舎の更新時期にあり、現在も改修を進めているところです。

未収入金(対前年度比 +10.8億円)

未収入金の増は、主に新型コロナウイルス感染症関連補助金の交付決定によるものです。



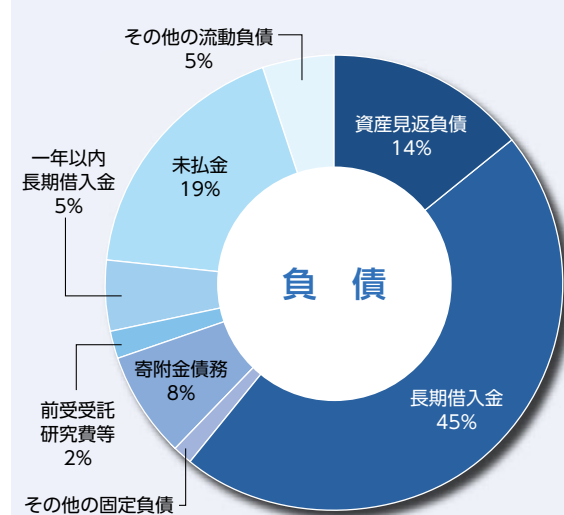
(億円)

負債の部	2019年度	2020年度	対前年度 増減
固定負債	138.7	131.9	▲ 6.8
資産見返負債	32.0	29.8	▲ 2.2
長期借入金	101.8	98.0	▲ 3.8
長期リース債務	1.4	0.2	▲ 1.2
その他の固定負債	3.4	3.8	0.4
流動負債	83.7	87.7	4.0
運営費交付金債務	0.5	0.5	0.0
寄附金債務	16.0	16.5	0.5
前受受託研究費等	4.2	5.3	1.1
一年以内長期借入金	11.3	10.5	▲ 0.8
未払金	39.4	42.7	3.3
リース債務	2.0	1.1	▲ 0.9
その他の流動負債	9.9	10.7	0.8
負債 計	222.4	219.7	▲ 2.7

純資産の部	2019年度	2020年度	対前年度 増減
資本金	140.9	140.9	0.0
資本剰余金	26.3	36.1	9.8
利益剰余金	34.7	44.4	9.7
うち当期未処分利益	8.7	14.3	5.6
純資産 計	202.1	221.6	19.5

長期借入金(対前年度比 ▲3.8億円)

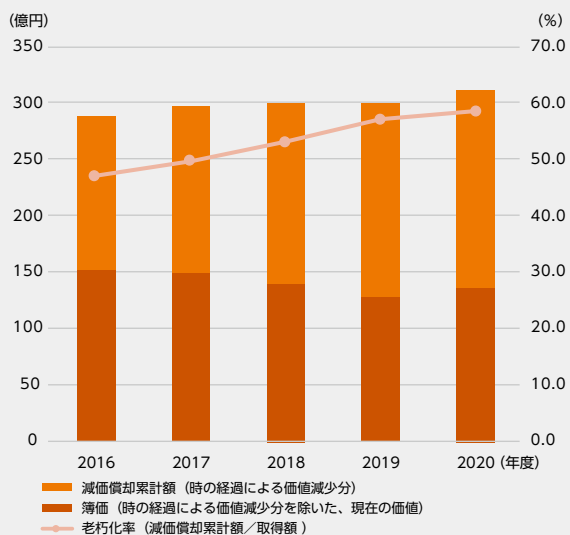
長期借入金の減は、主に病院再開発事業のために過去に調達した借入金の返済によるものです。一方、その再開発事業から約10年が経過していることから、病院機能改善に向けた新たな投資計画の必要性を示しています。



単位未満切捨てとしているため、合計が合わない場合があります。

貸借対照表の分析と戦略

建物の取得額と老朽化率の推移



滋賀医科大学は、開学から47年目を迎え、開学当初の建物をはじめとした資産の老朽化が進んでいます。



安全快適な
キャンパスの整備

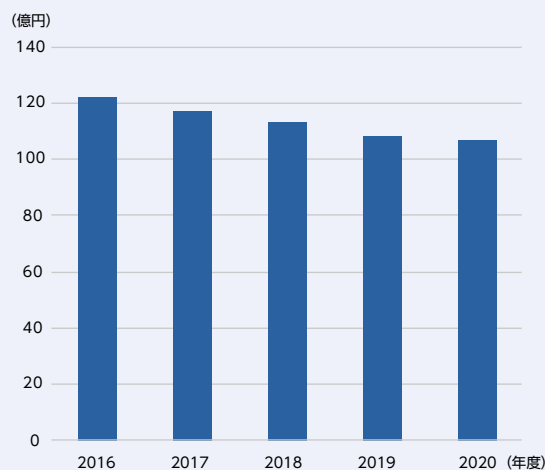


■サイエンスカフェ等の整備

[2023年3月 完成予定]

現在の基礎研究棟6階にて、研究領域や専門分野の垣根を越えた教員、学外研究者、学生が気軽に語り合う場となるサイエンスカフェを設置するなど、イノベーション創出に向けた施設整備を行っています。

借入金残高の推移



借入金の残高は順調に減少しており、新たな借入金による資金調達を実行できる時期にあります。



社会構造の変化に対応した
施設整備への投資



■附属病院の機能強化

[2021年7月 工事着手]

地域医療の中核を担う役割を果たすべく、借入金や自己資金などを活用し、より高度で安全な医療の提供を目指し、救急・集中治療などの強化を行う計画をしています。

損益計算書の概要

損益計算書は、一会計期間(4月1日～3月31日)における費用、収益、利益を表し、大学の運営状況を明らかにするものです。

(億円)

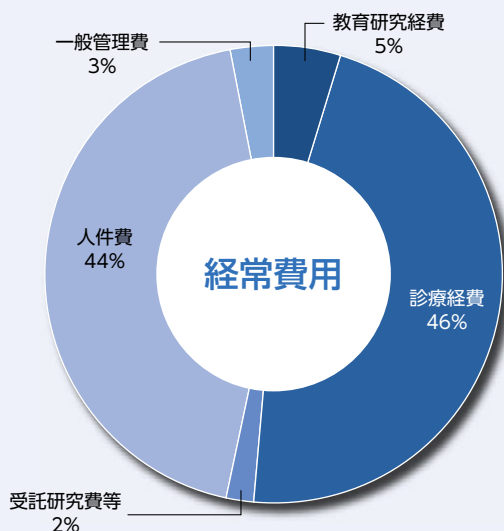
費用等	2019年度	2020年度	対前年度 増減
経常費用	319.1	309.1	▲ 10.0
教育研究経費	15.6	16.1	0.5
診療経費	148.7	141.4	▲ 7.3
受託研究費等	6.1	6.1	0.0
人件費	139.5	136.7	▲ 2.8
一般管理費	8.4	8.3	▲ 0.1
その他	0.6	0.3	▲ 0.3
臨時損失	1.4	0.5	▲ 0.9
当期総利益	8.7	14.3	5.6

診療経費(対前年度 ▲7.3億円)

コロナ禍による入院・外来患者数減少に伴い、診療経費も減少しています。また、コンサルタント業者を活用した医薬品等の価格交渉により診療経費を削減しています。

人件費(対前年度 ▲2.8億円)

2019年度は定年退職や役員の任期満了による退職手当の増などにより、一時的に増加したため、2020年度は減少しています。



(億円)

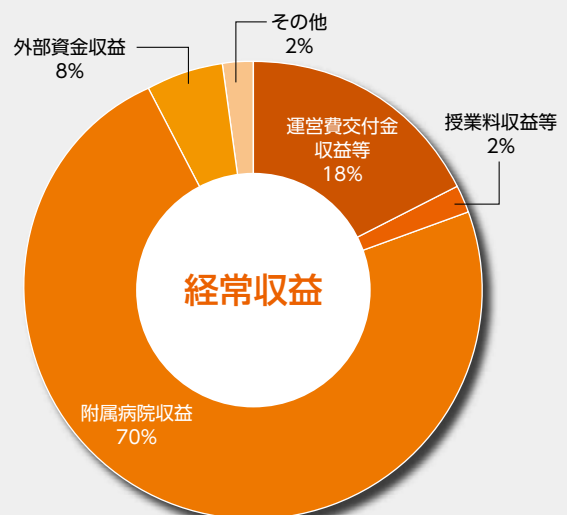
収益等	2019年度	2020年度	対前年度 増減
経常収益	327.1	322.6	▲ 4.5
運営費交付金 収益等	57.7	58.2	0.5
授業料収益等	6.5	6.0	▲ 0.5
附属病院収益	241.1	225.2	▲ 15.9
外部資金収益	13.2	26.5	13.3
その他	8.3	6.5	▲ 1.8
臨時利益	1.4	0.2	▲ 1.2
目的積立金取崩	0.7	1.0	0.3

附属病院収益(対前年度比 ▲15.9億円)

コロナ禍により入院・外来患者数が減少したことや、新型コロナウイルス感染症重症患者受入要請に対応するための病床確保を行ったことにより、減少しています。

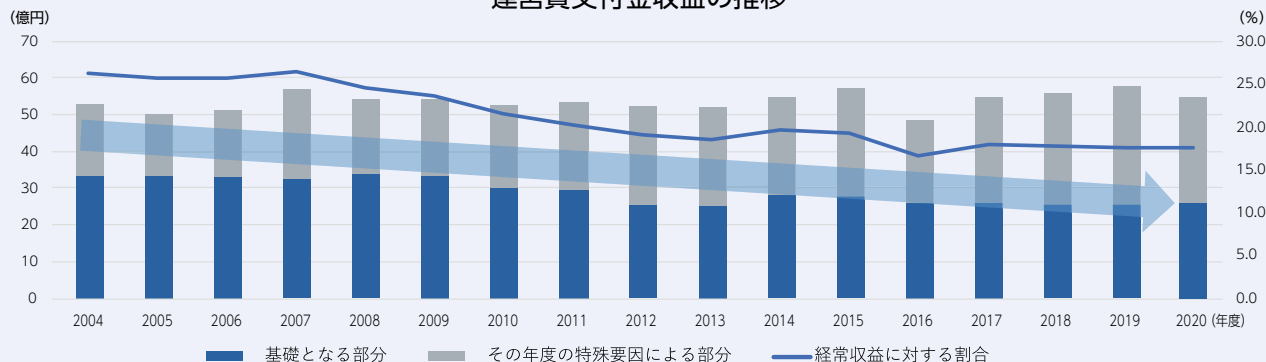
外部資金収益(対前年度比 +13.3億円)

新型コロナウイルス感染症に関する補助金等を、積極的に申請し、交付決定を受けています。この補助金を活用することで、新型コロナウイルス感染症重症患者受入に必要な機器整備を行っています。



損益計算書の分析と戦略

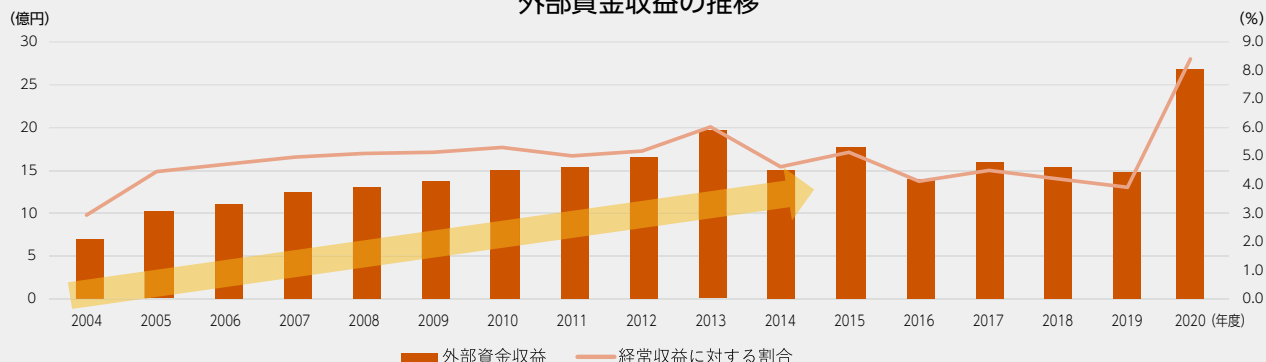
運営費交付金収益の推移



運営費交付金の内訳として、基礎となる部分とその年度の特殊要因により交付される部分があります。運営費交付金収益全体の金額で見ると特殊要因による増減がありますが、2004年の国立大学法人の法人化以降、基礎となる部分については、一定の係数をかけて削減されていくという仕組みが導入されています。これによって、国

立大学は、従来のように運営費交付金に頼った運営を行うのではなく、自ら“経営”していく姿勢が求められるようになりました。滋賀医科大学においては、主に次の2点「外部資金収益の増加」と「附属病院収益の増加」に力を入れることで、自己収入増を図っています。

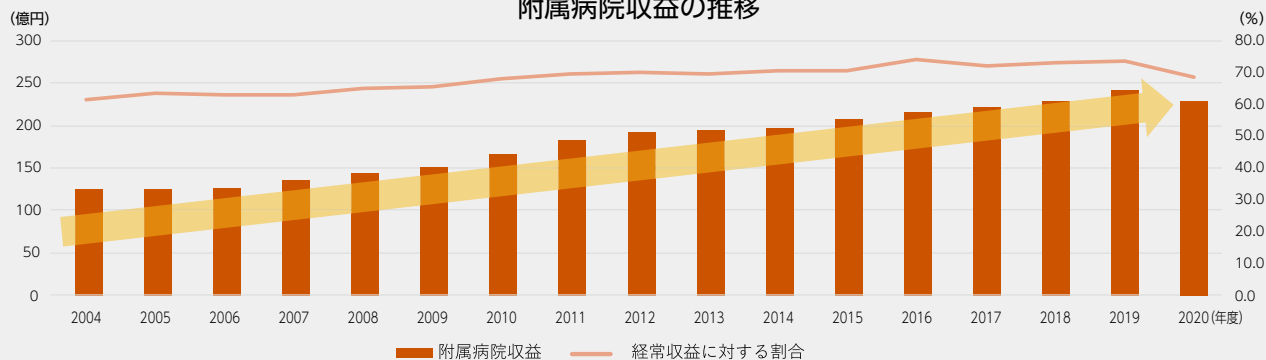
外部資金収益の推移



法人化以降、外部資金受け入れを担当する研究推進課の立ち上げを行うなど、教員の外部資金獲得のサポート体制を構築してきました。2017年度には研究活動統括本部を設置し、近年の頭打ちを打破すべく、大学としてさらなる強化に努めています。2020年度は新型コロナウイルス感染症の患者さんを受け入れるなど、附属病院が

果たすべき地域医療への貢献に対する取り組みによって、補助金等の財政支援を受けました。また、アドバイザーを受け入れる等、産学連携体制の一層の強化を図り、外部資金獲得に向けた取り組みを行いました。

附属病院収益の推移



法人化以降、附属病院収入は堅調に右肩上がりとなっています。近年は特に、地域の医療機関との連携の推進により、患者さんの受入を強化したことが収益増につながっています。また、高度急性

期の拠点病院として、より多くの救急患者さんを受け入れています。2020年度は新型コロナウイルス感染症対応に伴う診療制限により収益は減少しました。

キャッシュ・フロー計算書の概要

キャッシュ・フロー計算書は、一会計期間(4月1日～3月31日)における現金の出入りを活動別に表すものです。

区分	2020年度 (億円)
I 業務活動によるキャッシュ・フロー	20.5 (+)
II 投資活動によるキャッシュ・フロー	10.9 (+)
III 財務活動によるキャッシュ・フロー	▲ 7.0 (-)
IV 資金増加額	24.4
V 資金期首残高	48.7
VI 資金期末残高	73.1

I 業務活動

運営費交付金、病院収入や外部資金などの収入によって人件費や医薬品などにかかる支出がまかなわれ、プラス計上となっています。資金的に健全に本来業務がなされたことがわかります。

II 投資活動

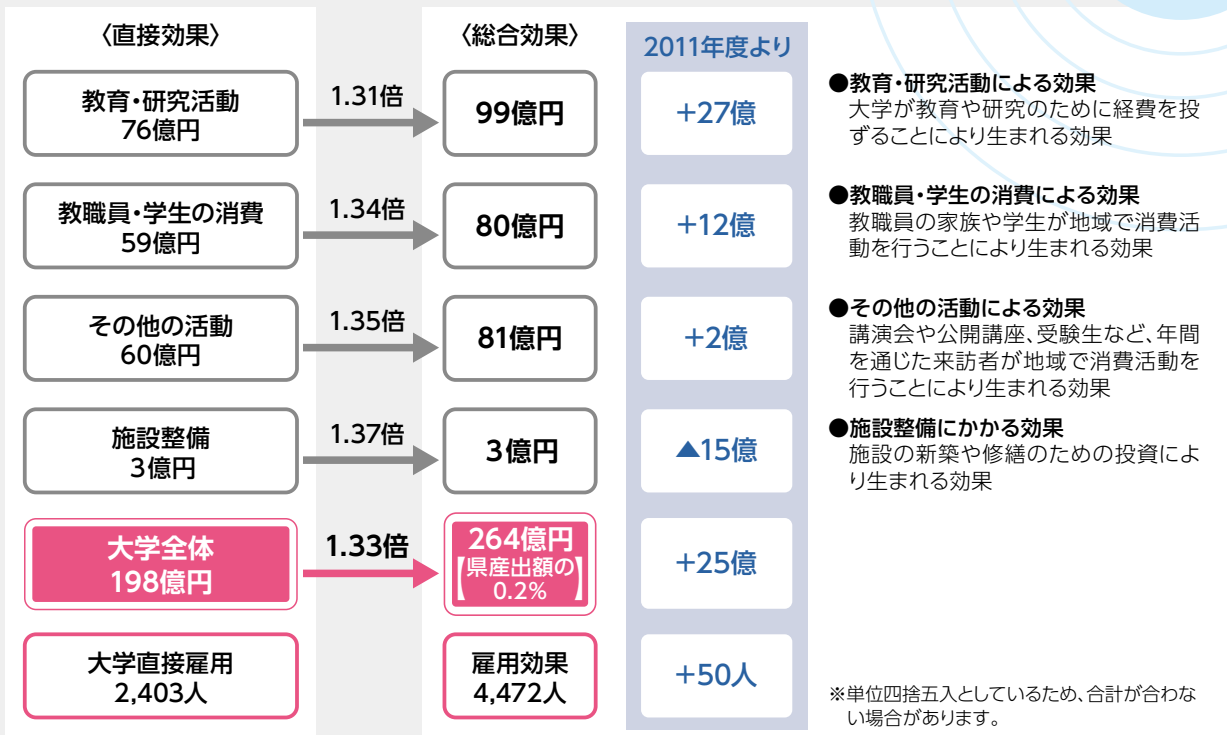
定期預金の償還により、プラス計上となっています。

III 財務活動

借入金の返済などの支出を行ったため、マイナス計上となっています。

滋賀県内への経済波及効果

2019年度 滋賀県内への経済波及効果



2019年度の滋賀医科大学の最終需要は314億円であるが、滋賀医科大学が立地する事に起因した各消費及び投資活動がもたらす1年間の直接効果は合計198億円であった。各活動の支出から誘発される生産と、その生産を担うために連鎖的に発生する他の産業の生産に、新たに生み出された雇用所得のうち消費に使われた金額を合算した金額が総合効果であり、滋賀医科大学の立地は滋賀県に年間264億円の経済波及効果を及ぼしていると推計される。従業員(役員含む)1人当たりの経済波及効果は約1,000万円と推計される。

滋賀医科大学の経営収益314億円と経済波及効果264億

円を合わせた577億円は滋賀県全体の産出額である13兆9,958億円の0.41%を占めている。産業別の経済波及効果で見ると医薬品の影響により化学製品が全体の16.1%、次いで商業15.1%、不動産10.7%が続いた。滋賀医科大学の立地により生み出される新たな雇用は2,069人であり、大学自体が雇用する2,403人と合わせて4,472人となり県内従業者数677,976人(平成27年総務省調査)の0.7%に相当する。今回の結果は2011年度のデータを用いた総合効果239億円から25億円増加しており、8年間の増加率は約10%と高い伸びを示した。



表紙デザイン

校章の濃い青と、びわ湖の水色、ヒポクラテスの樹をイメージしてデザインを作成しました。表紙を走る糸は滋賀医科大学から医学・看護学そして医療を紡ぎ、地域そして世界へ繋いでいくという想いを表しています。



学章デザイン

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたものです。中心に向かって、外からさざ波の波動—これは人々の医への期待である。外に向かって中心から一隅を照らす光の波動—これは人々の期待に返す答えである。

滋賀医科大学 統合報告書 2021 SUMS Integrated Report 2021

【報告対象範囲等】

対象組織: 国立大学法人滋賀医科大学
対象期間: 2020年4月1日～2021年3月31日
(一部に上記期間前後の活動内容等を含みます)

2022年1月発行

発行 滋賀医科大学IR室運営会議

編集・発行にご協力いただきました関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

滋賀医科大学IR室
〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町
Email: hqir@belle.shiga-med.ac.jp
<https://www.shiga-med.ac.jp/>

将来に関する記載の注意事項

本報告書に記載されている将来に関する記載は、本報告書発行日現在においての情報に基づくものです。それらは未来への展望等を含んでおり、その実現を約束する趣旨のものではありません。今後、様々な要因によって結果は大きく異なる可能性があります。



ACCREDITED
2018.9-2025.8

医学部医学科は、平成29年度に一般社団法人日本医学教育評価機構(JACME)による医学教育分野別評価を受審し、本学の医学教育が国際基準に準拠していると認定されました。



UNIVERSITY
ACCREDITED
March 2016

学校教育法第109条第2項の規定による「大学機関別認証評価」を平成27年度受審し、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。



日本医療機能評価機構認定病院

医学部附属病院は、平成16年2月に日本医療機能評価機構の実施する病院機能評価の初回認定を受けて以降、5年毎に更新認定を取得しています。



統合報告書ウェブページ



統合報告書アンケート
ご協力をお願いいたします



国立大学法人

滋賀医科大学

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

